

第2号炉穴 (第54図、第60図4～7、第63図6、第64図17)

F1J1区に位置する。第1号炉穴と重複するが、第2号炉穴の方が古い。第2号炉穴は4基の重複から構成されており、それぞれは拡張によって重複するものと思われる。新旧関係は2aが最も古く、2bが最も新しい。2cと2dでは2dが新しく、2aと2cの関係は不明である。2aは楕円形の一端から炉床が突出する形状を呈し、2は長楕円形の北壁が炉床となる。遺物は殆どなく、土器は混入した第60図4～7の燃糸文系土器群が出土しているのみである。石器は第63図6の鏃器と第64図17のスタンプ形石器が出土し、他に径3cm程の黒曜石の原石も出土している。

第4号土墳 (第55図、第22図13、17)

F1J1区に位置する。燃糸文期の第11号住居跡と重複する。1基だけ他の土墳群と離れて存在する。プランは不整楕円形を呈し、長径1.64m、短径1.00m、深さ約30cmを測る。遺物は土墳の上面部分から出土し、図版の都合で第22図に掲載した。13、17は比較的薄手で繊維を含み、擦痕状の条痕文を施文する。

第24号土墳 (第55図、第59図1、2、第60図8～第61図28、第63図3、12、第64図20)

F1J1区に位置する。北に隣接して第10号住居跡が存在する。プランは長楕円形を呈し、長径3.26m、短径1.76m、深さ最深部で約50cmを測る。覆土は1層が硬い黒色土ブロックを含む黒褐色土、2層が細砂粒を多く含む黒色土、3層がロームブロックを含む黄褐色土である。遺物は2箇所集中して出土している。第59図1は底部を欠損するがほぼ完形の土器で、口径18cm、現存高24.8cmをはかる砲弾形の尖底深鉢形土器であり、角頭状の口唇部がやや開く器形を呈する。内外面とも細かな条痕文を施文する。2は口縁部が一部現存するもので、口唇部下約2cm程のところに上下を爪で挟んで中央部を隆起させた爪形文を、横位に巡らして口縁部文様帯を区画している。推定口径約15cm、現存高5cmを測る。口縁部には横位の条痕文を施文し、胴部は縦位となる。第60図17は角頭状の口唇部が開き、押圧状の刻みを施す波状縁の深鉢である。内外面とも擦痕状の整形で、砂粒、小礫を多く含む。18も小波状縁を呈し、内外面に浅い条痕を施す。他の胴部破片はあまり条痕文の目立つものではなく、擦痕状の整形が多い。8～16は流入の燃糸文系土器群で、8が縄文施文、10～16が燃糸施文、9、14が無文土器である。12は土製円盤である。

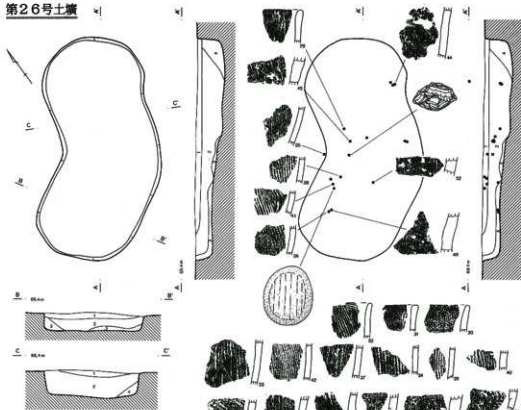
第25号土墳 (第55図)

F1J1区に位置する。北に第24号土墳、西に第26号土墳が存在する。プランは楕円形を呈し、長径2.20m、短径1.76m、深さ42cmを測る。覆土は第24号土墳と同様で、遺物は出土していない。

第26号土墳 (第56図、第61図29～52、第63図3、9、12、第64図18)

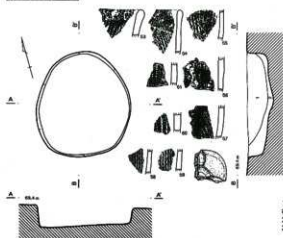
F1J1区とF2J1区の境に位置する。北に第37号土墳、西に第28号土墳が存在する。プランは不整の長楕円形を呈し、長径3.56m、短径1.62m、深さ最深部で42cmを測る。覆土は1～3層までは第24号土墳と同様であるが、4層はローム粒子を多く含む層で、3層よりも黒色土ブロックを

第26号土坑



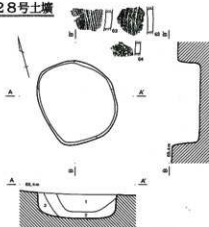
- 1層 黒褐色土、2層土と同様であるが、しまりに欠ける
- 2層 黒色土、細砂粒を含み非常に硬くしまる
- 3層 ロームを主体とし、2層土のブロックを含む
- 4層 ロームを主体とし、2層土粒を若干含む

第27号土坑



- 1層 黒褐色土、2層土と同様であるが、しまりに欠ける
- 2層 黒色土、細砂粒を含み非常に硬くしまる

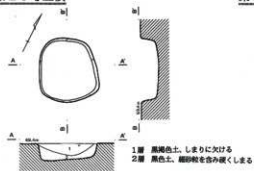
第28号土坑



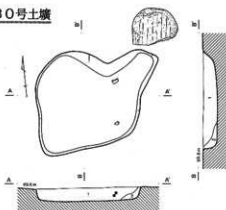
- 1層 黒褐色土、2層土と同様であるが、しまりに欠ける。2層土のブロックを部分的に含む
- 2層 黒色土、細砂粒を含み非常に硬くしまる
- 3層 ロームを主体とし、2層土のブロックを含む

第56図 条痕文期の土坑 (2)

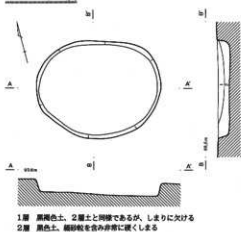
第29号土坑



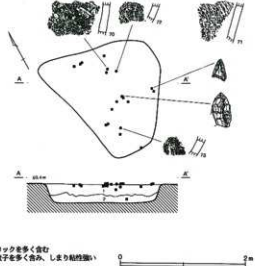
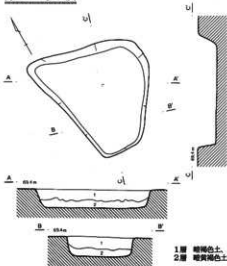
第30号土坑



第31号土坑

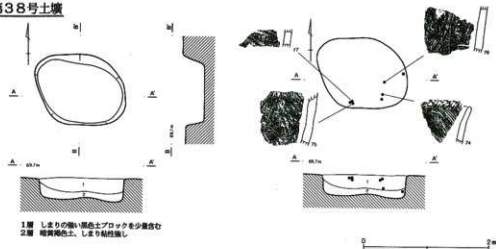


第37号土坑



第57図 糸織文期の土坑 (3)

第38号土壌



1層 しまりの薄い褐色土ブロックを少量含む
2層 暗黄褐色土、しまり粘性強し

第58図 条痕文期の土壌 (4)

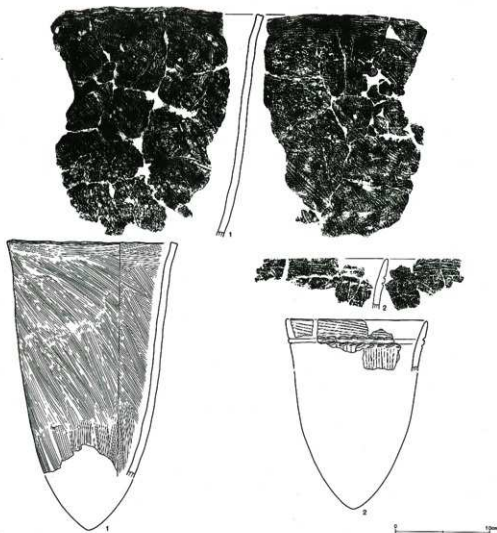
少なく含む。遺物は混入した燃糸文系土器群が多いが、第61図43～52は条痕文土器である。29～42は燃糸文系土器群であり、29、33～38は縄文施文土器、30～32、39～42は燃糸施文土器である。29は肥厚する口唇部が開く器形で、口唇部整形後縄文RLを口端部から施文する。32は口縁部に一段横位に燃糸文を施文し、口唇部整形との前後関係は不明である。43～52の条痕文系土器群は口縁部がなく、粗い擦痕状の整形を施すのが一般的であるため、古い段階の条痕文土器と思われる。胎土には繊維をあまり含まず、白色粒子、細砂粒、小礫を多く含む。いずれも明るい橙褐色系の色調を呈する。第63図3は石斧状の大形礫器であり、9、12は厚身の礫器である。いずれも片面からの調整剝離が著しい。

第27号土壌 (第56図、第61図53～61、第63図11)

F2J1区に位置する。北に第28号土壌が存在する。プランは楕円形を呈し、長径1.86m、短径1.52m、深さ最深部で40cmを測る。覆土は2層であるが第24号土壌と同様である。遺物は流入した燃糸文系土器群のみであり、石器も燃糸文期のもと思われる。覆土の類似性から、条痕文期所産と思われる。第61図53、56、57、61は縄文施文土器である。53は肥厚する口唇部が開き、口唇部整形後、口縁部に縄文を施し、最後に口端部に一段横位の縄文を施す。54、55、58～60は燃糸施文土器で、54は口縁部にやや無文部を置いて燃糸文を施文する。燃糸は全てRである。第63図11は2側縁加工の礫器であり、丸く扁平な礫を素材としている。

第28号土壌 (第56図、第62図62～64)

F1J1区に位置する。南に第27号土壌、東に第26号土壌が存在する。プランは楕円形を呈し、長径1.34m、短径1.26m、深さ38cmを測る。覆土は3層で構成され、第24号土壌と同様である。遺物は燃糸文系土器群だけであり、62、63が燃糸Rを、64が縄文RLを施文する。



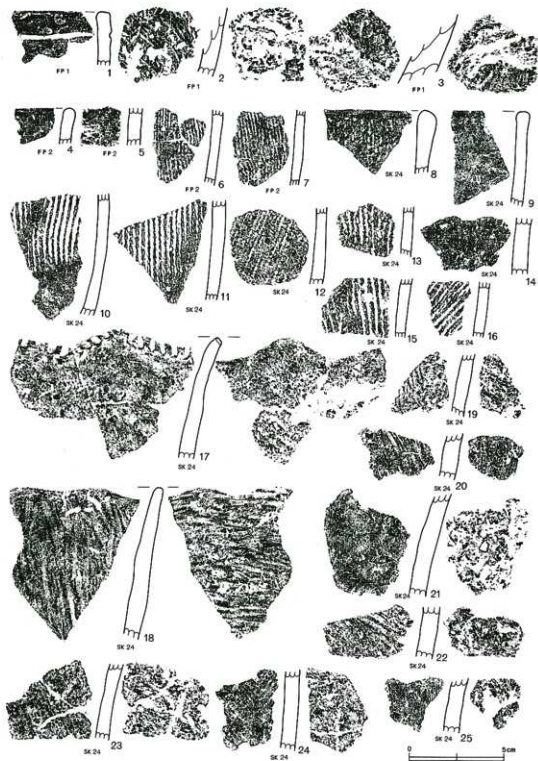
第59図 条痕文期土壌出土土器実測図

第29号土壌 (第57図)

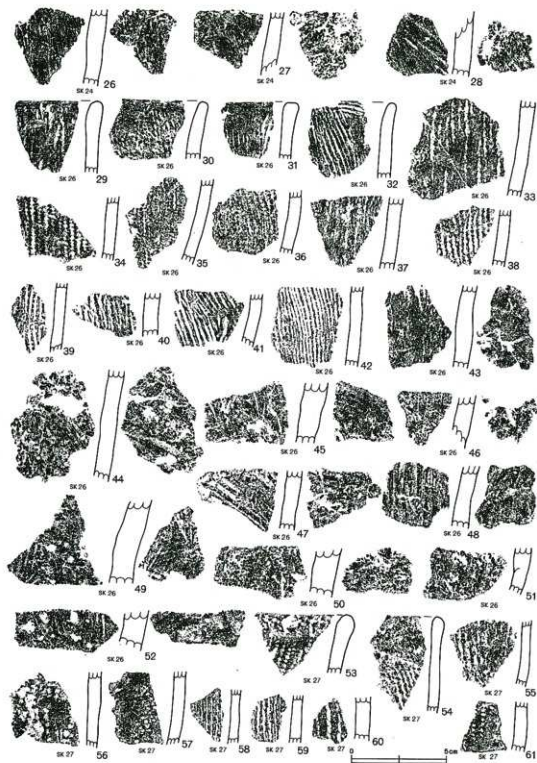
F 1 J 2 区に位置する。南東に第28号土壌が存在する。プランは楕円形を呈し、長径1.02m、短径0.94m、深さ30cmを測る。覆土は2層で構成されるが、第24号土壌と同様である。遺物は出土していない。

第30号土壌 (第57図、第63図14)

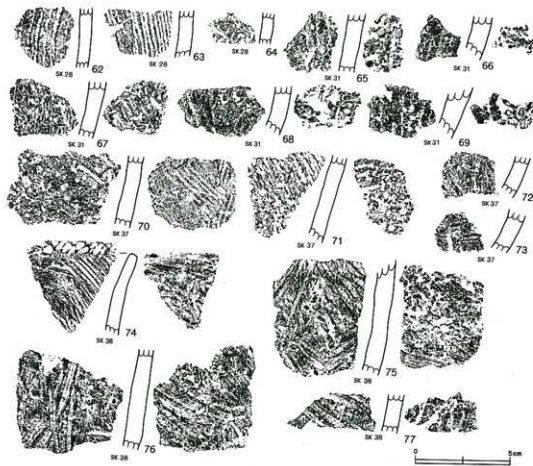
F 1 J 2 区に位置する。南に第29号土壌、南東に第31号土壌が存在する。プランは不整楕円形を呈し、長径1.86m、短径1.56m、深さ19cmを測る。覆土は2層であるが、第24号土壌と同様である。遺物は第63図14が出土しており、欠損する磨石である。



第60图 条痕文期炉穴·土壤出土土器 (1)



第61图 条痕文期土壇出土土器 (2)



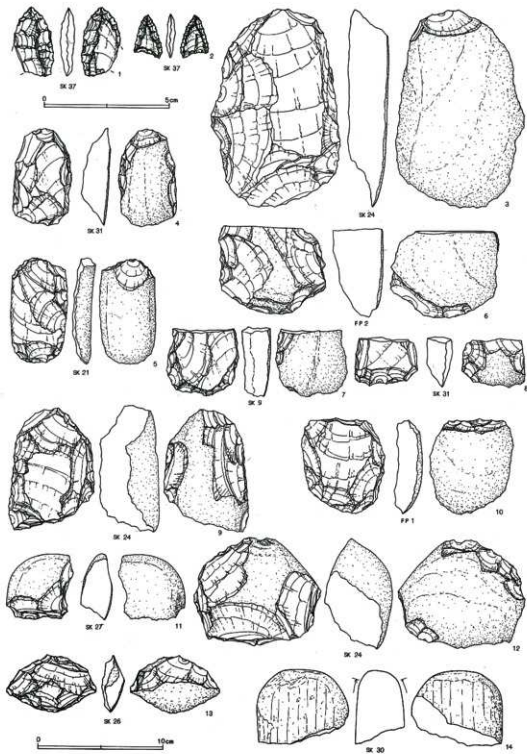
第62図 条痕文期土壌出土土器 (3)

第31号土壌 (第57図、第62図65～69、第63図4、8)

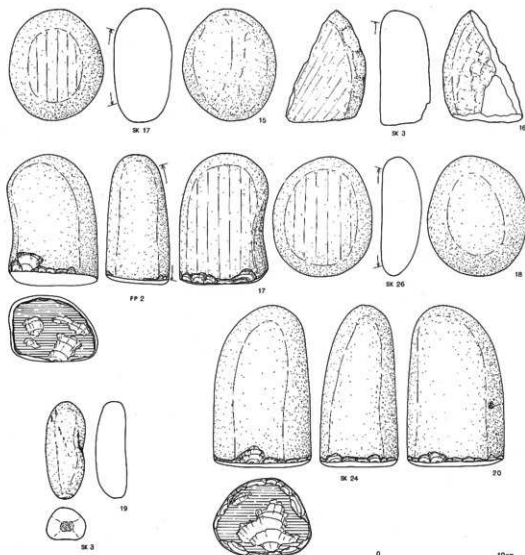
F1J1区に位置する。北東に第30号土壌、南東に第37号土壌が存在する。プランは楕円形を呈し、長径2.00m、短径1.56m、深さ20cmを測る。覆土は2層であるが、第24号土壌とほぼ同じである。出土土器は条痕文系土器群で、いずれもあまり条痕文が目立たず、粗い捺痕状の成形を施している。胎土に繊維を少量と、白色粒子を多く含み、赤褐色を呈する。石器は2点出土しており、4は均整のとれた石斧であり、裏面に自然面を多く残す。8は頭部を欠損する石斧で、刃部裏面には稜表を残す。両者とも直刃を呈し、条痕文期の石器の特徴をよく表している。

第37号土壌 (第57図、第62図70～73、第63図1、2)

F1J1区に位置する。南に第26号土壌が存在する。プランは不整形を呈し、長径1.76m、短径1.62m、深さ30cmを測る。覆土は2層からなり、1層は他の土壌と同様であるが、2層はローム粒子を多く含む暗黄褐色土である。出土土器は条痕文系土器群で、いずれも捺痕状の成形を施すもので、暗赤褐色を呈する。石器は1がチャート製、2が黒曜石製の石鏃である。



第63図 縄文時代の土壌出土石器 (1)



第64図 縄文時代の土壙出土石器 (2)



第38号土壙 (第58図、第62図74~77)

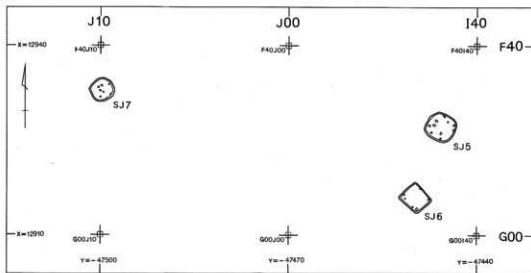
F1J1区に位置する。北西には第1号炉穴が存在する。プランは楕円形を呈し、長径1.36m、短径1.12m、深さ最深部で21cmを測る。覆土は2層で、第24号土壙と同様である。出土土器は条痕文系土器群で、74は角頭状の口唇部が開き、口唇部に絡条体圧痕文を施文する。条痕文は内外面に施文されるが、擦痕状に近い。他にも粗い擦痕状の条痕文を施文し、繊維を若干含み、砂粒を多く含む。赤褐色を呈し、堅緻な土器である。

(5) 前期の遺構と遺物

第5号住居跡(第66図～第70図)

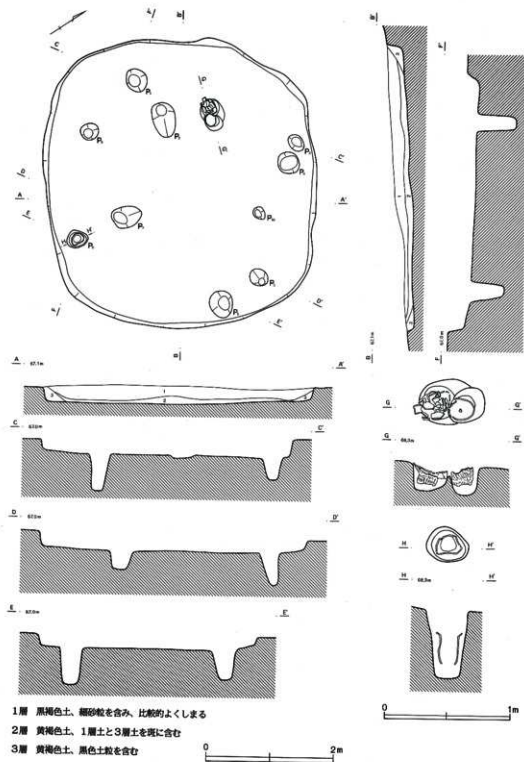
F4 I 4区に位置する。南に第6号住居跡が存在する。南北方向に長軸をとる隅丸方形を呈するが、北から約45度程西に振れている。長径4.50m、短径4.30m、深さ30cmを測る。床面には若干の凹凸がみられ、壁はやや直に立ち上がる。住居跡が台地の緩い肩部に構築されているため、床面は谷のある南東方向に傾斜しており、谷部にかかる壁は検出が難しかった。柱穴は建て替えが行われているため、合計9本検出されている。深さはP1=59cm、P2=23cm、P3=34cm、P4=56cm、P6=48cm、P7=28cm、P8=58cm、P9=25cmを測る。P8からは第68図4が出土している。炉は埋燵炉で、中央部北側の奥壁に寄った場所にあり、2個体の土器が重複して埋設されていた。第68図1が古い埋燵で、2が新しく埋設された土器である。覆土は3層で構成されており、1層が砂粒を多く含みしまりの強い黒褐色土、2層が黒色土を斑に含む黄褐色土、3層が黒色土粒子を少量含む黄褐色土である。所属時期は黒浜式期と諸磯a式期の2時期である。

住居跡からの出土遺物は75点で、土器が51点、石器が24点であった。第68図1は建て替える前の住居跡の炉体土器である。緩い4単位の波状口縁を呈し、胴部で括れる器形をなし、底部を欠損する。口縁部は口唇部が「く」状に内折し、外端部に強い削り状の整形を施している。縄文は0段多糸縄文RLを横位に施文するが、原体幅が狭く、施文幅も短いのが特徴的である。胎土に繊維を多く含み、脆弱な土器であるが器面整形は丁寧である。口径27cm、現存高26cmを測る。黒浜式に比定される。2は建て替え後の新しい炉体土器である。深鉢形土器の底部付近の胴部を輪切りにして使用しており、全周する。地文は2段の縄RLに1段Rの縄を、第2種巻に撚り合わせた異条斜縄文であり、原体幅が広く、施文幅も広い。二次焼成によって器面は荒れているが、繊維を含まず堅緻な胎土である。現存高12cmを測る。諸磯a式に比定される。

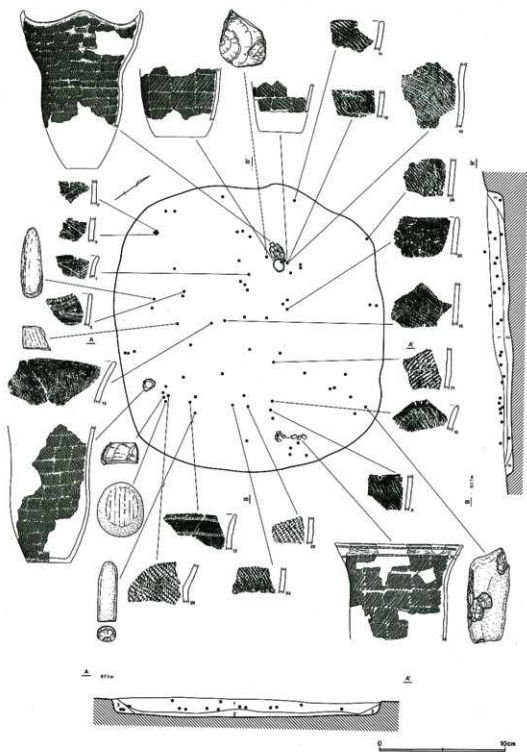


第65図 前期の遺構

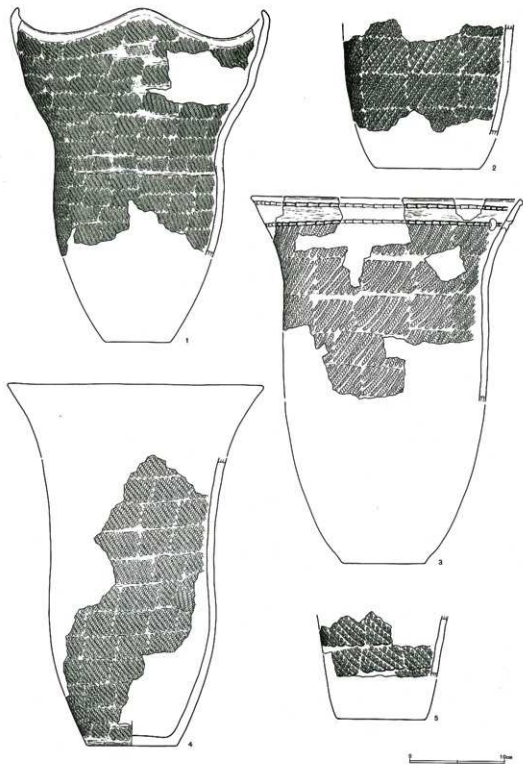
四反歩遺跡南地区



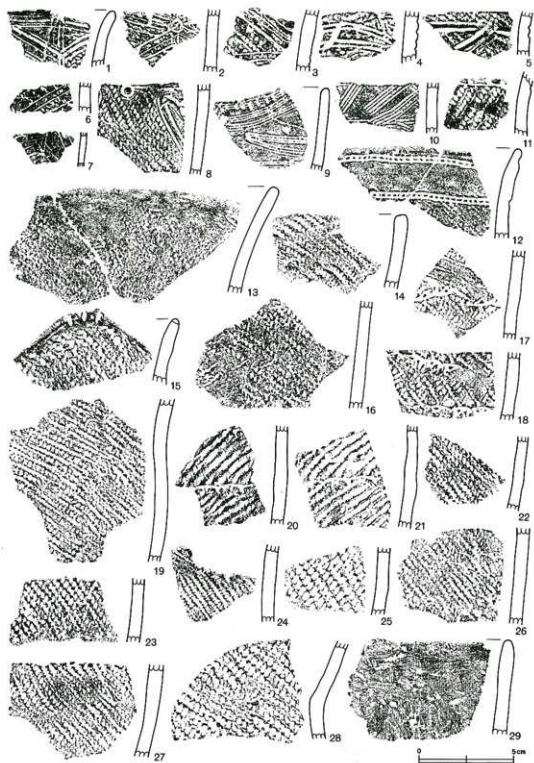
第66図 第5号住居跡



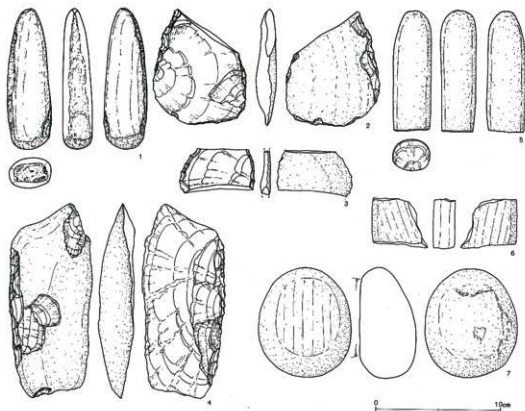
第67图 第5号住遺物分布图



第68图 第5号住出土土器 (1)



第69图 第5号住出土土器 (2)



第70図 第5号住出土石器

3は口縁部が朝顔状に開く器形を呈し、胴下半部を欠損するがほぼ全周する。口縁部は半截竹管の内面を使用した幅狭の結節沈線文2本で、幅狭の口縁部無文帯が区画されている。胴部の縄文は単節LRであるが、太細の原体を撚り合わせているため付加条縄文に類似する。推定口径約29cm、現存高21cmを測る。4はPit 8から出土した土器で、出土当初は頸部から上を欠損するだけであったが、非常に脆く細片と化したため、現状にまで復元し得なかった。胴部が細く、口縁部が朝顔状に開く器形を呈するものと思われ、底部から頸部までが現存する。胴部は文様が描出されているところはなく、単節RLが整然と横位に施文されているだけである。5は炉体土器の中及びその周辺から出土したもので、約半周程が現存する。底部近くの破片で、2段LRに1段Lを撚り合わせた異条斜縄文である。

第69図1～10は「米」字状文を描出する土器群である。1はやや先細りして開く口縁部に、3本単位の沈線文でいわゆる「米」字状文系のモチーフを描出する。口縁部を3本沈線文で区画し、縦位区画線を施文した後、鋸歯状文を描出している。2は2本束ねの半截竹管内面施文による4本の平行沈線文で「米」字状文を描出し、交点に円形竹管文を施文する。施文は縦位の区画線、鋸歯状文、円形竹管文の順である。地文には単節RLを施文している。3は施文、胎土、色調等から2と同一個体と思われる。4は半截竹管の平行沈線文で描出するものであり、縦位区画線は平行沈線文

のみで施文されるが、鋸歯状文部分は平行沈線文を単独で2本施文しており、しかも曲線状に施文する。地文に、縄文を施文するが、原体は判別されない。5は基本的に4と同様な施文であるが、横位区画は離れた平行沈線文で区画し、鋸歯状部分は平行沈線文を重複施文する。6は単節縄文RL地文上に、浅く繊細な平行沈線文を施文する。7は非常に薄身の土器であり、単沈線文で縦位区画した後鋸歯状文を施文している。

8は末端が閉じる鋸歯状文を施文するもので、横位区画線上に円形竹管文を施文し、地文に単節RLを施文する。9、10は櫛歯状工具による条線文で描出するものである。9は波状口縁を呈し、口縁に沿って3本歯の櫛歯状工具の押し引き条線文を施文し、末端を閉じる鋸歯状文を施文する。10は4本歯の条線文で描出するが、末端を閉じない鋸歯状文を施文する。11は幅の広い結節沈線文で文様体を区画するものであり、胴部に太細の撚り合わせの単節LRを施文する。12は朝顔形の深鉢形土器で、口縁部の無文帯を2本の細い爪形文で区画する。爪形文は平行沈線文施文後に押し引き状に連続刺突するものである。地文は単節RLを施文するが、無文帯内は磨消されている。

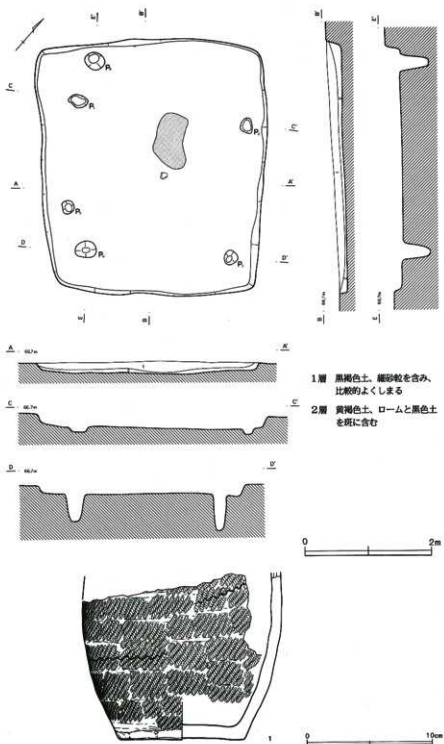
13～28は地文のみを施文する土器群である。13、14は平縁土器で、13は口縁部が開き、14は内彎気味に開く器形を呈し、それぞれ単節RLを施文する。15は波状口縁で開く器形を呈し、波頂部に刺突する様な3箇所の刻みが施されている。16～21は原体の末端の結束が施文されているものである。20、21は同一個体で、無節Lを施文する。22～28はいずれも単節RLの斜縄文のみが施文されている破片であり、28は大きく屈曲する器形を呈する。29は無文土器で、砂粒、小礫を多く含み、粗い器面調整を施し、明赤褐色を呈する。

石器は製品が7点出土した。1は磨製石斧の刃部を再生した敲石である。刃部以外は敲打痕と研磨痕がみられる。2～4は打製石斧で、片面に自然面を残すのが特徴的である。2は横長の剥片を縦に使用した石斧で、剥片の形状を大きく変形することなく、両側縁に調整剝離を施している。頭部を欠損するが、幅広の石斧である。3も2と同様に横長剥片を使用するが、頭部と刃部を欠損する。4も同様に横長剥片を縦に使用した石斧で、打点側を取り除く調整剝離を施すぐらいで、他の整形を殆ど行わない。5は円柱状の礫が半割されたもので、敲石の折れたものと思われる。6は砥石であり、7は片面利用の磨石である。

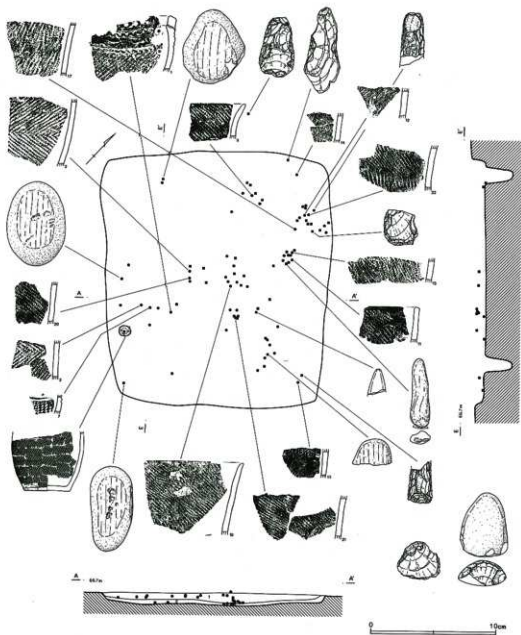
Pit 8出土土器は、調査時の所見から埋甕ではないことは明らかであるが、単なる廃棄でないことも明らかであり、何の目的で埋設したのか不明な点が多い。Pit 8が建て替え前の黒浜式期の住居跡の柱穴であるとしたら、その柱穴を塞ぐ際の儀式的な行為としての解釈も可能である。また、柱穴が諸磯a式期のものであるとすると、この住居跡を廃絶する際に上屋構造を取り除き、柱も抜きさることが必要である。柱穴の深さや配置から、P1、P4、P6、P8と、P2、P3、P5、P7の組み合わせが考えられる。炉の位置関係からすると、前者の間隔の開いた柱穴の配置が黒浜式期で、後者が諸磯a式期と捉えるのが妥当であり、前者の柱穴を埋める際に、儀式的に後者の時期の土器を埋設したと解釈するのが自然である。縄文人の精神性の一端が垣間見られる事例である。

第6号住居跡（第71図～第74図）

F4I4区に位置する。北に第5号住居跡が存在する。南北方向に長軸をとる長方形を呈するが、

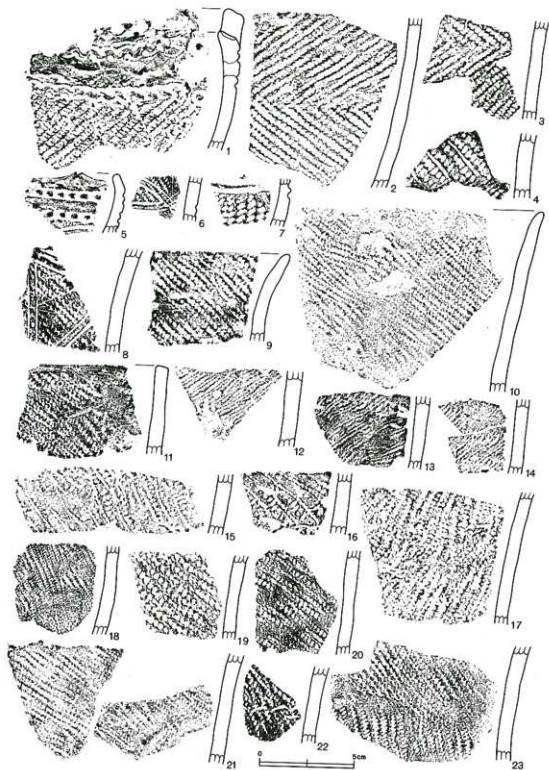


第71図 第6号住居跡

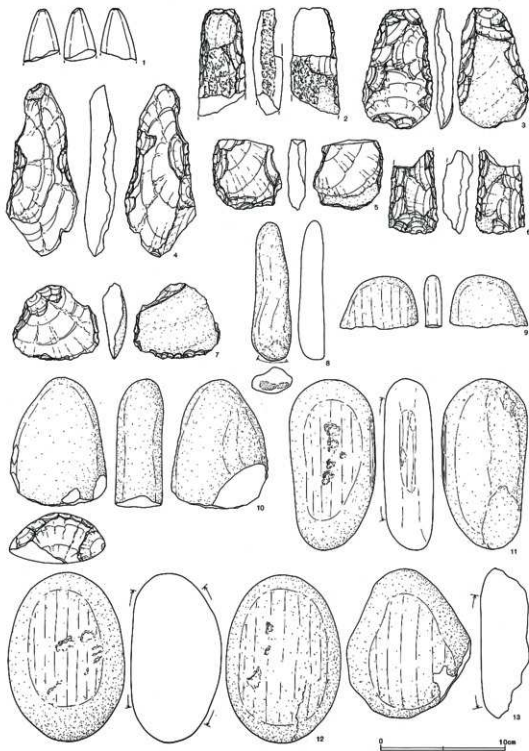


第72図 第6号住遺物分布図

北から約40度程西へ振れている。長径4.06m、短径3.58m、深さ最深度で26cm程を測る。床面はほぼ平坦面を呈するが、斜面の傾斜する南東方向に緩く傾斜している。壁は比較的直に立ち上がるが、斜面側の壁は不明瞭であった。柱穴は6本検出され、深さはP1=7cm、P2=8cm、P3=58cm、P4=43cm、P5=7cm、P6=44cmを測る。炉は地床炉であり、中央部やや北西寄りに位置する。覆土は2層で、1層が細砂粒を含みしまりのある黒褐色土、2層がロームブロックと黒褐色土プロ



第73图 第6号住出土土器



第74图 第6号住出土石器

四反歩遺跡南地区

ックを含む黄褐色土である。所属時期は諸磯 a 式期である。

遺物は92点出土しており、土器が55点、石器が37点である。土器は黒浜式と諸磯 a 式が混在するが、後者が圧倒的に多い。1～4は繊維を含む黒浜式である。1は緩い波状口縁を呈し、口縁部が内彎気味に開く器形で、波頂部に突起を貼付する。口唇部は内削状を呈し、押圧状の刻みを施す。口縁部は半截竹管による2本のコンパス文で、幅狭の無文帯が区画され、波頂部から円形竹管文が垂下する。また、突起下部には大きな円孔文が貫通する。2、3は羽状縄文が施文され、4は付加条縄文が施文される。

15～23は無繊維の諸磯 a 式土器である。5は緩い波状口縁を呈し、2列の結節沈線文で無文帯を区画する。無文帯下には沈線文のモチーフを描出するが、構成は不明である。6、8は地文に単節RLを施文し、「米」字状文を施文するもので、両者とも縦位区画線を施文した後に、鋸歯状文を施文する。両者とも半截竹管内面を使用した平行沈線文で施文するものである。7は平行沈線文で文様帯が区画され、単節RLが施文される。第71図1は胛下半部から底部にかけての破片であるが全周し、結節文が部分的にみられる。

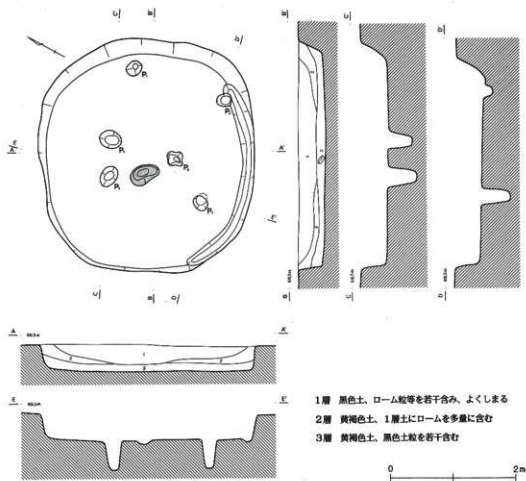
9～23は縄文のみ施文される土器群で、9～11は平縁の口縁部破片である。9、10が丸頭状の口唇部が開くのに対して、11は角頭状口唇がやや内彎気味に立つ器形を呈する。12～14はLにrを第1種巻きに付加した付加条縄文で、無節Lとなる。15、16は同一個体で2段LRに1段Lを第2種巻きに撚り合わせる異条縄文である。17～23は単節RLの斜縄文が施文される。

石器は製品が13点出土した。第74図1は乳棒状磨製石斧の頭部であり、先端部が尖る様に磨かれている。2は刃部を欠損するが、磨製石斧の未製品と思われる。調整剥離を施した後に、全面に敲打を施している。3～6は打製石斧である。3は裏面に大きく自然面を残し、側縁と頭部に調整剥離を施している。主要剥離面側では全周から調整剥離を施して、形状を整えている。4は横形の大型剥片を縦に利用した石斧であり、刃部には殆ど加工を施さず、剥離面をそのまま使用している。5は頭部を欠損するが、横形剥片を使用した石斧である。6は身の厚い、短冊形の石斧で、頭部を欠損する。7は横形剥片を使用した搔器で、背面に自然面を残す。刃部は礫表側に細かな調整剥離を施している。

8は細長い礫の端部を使用する敲石である。9は砥石であり、片面のみ使用されている。10はスタンプ形石器であり、底面には平坦面を形成するための細かな調整剥離を施す。11～13は磨石である。11は片面が使用され、側面に研磨を施す。12は両面が、13は片面のみ使用される。

第7号住居跡（第75図～第78図）

F4J0区とF4J1区の境目に位置する。周辺に遺構は存在しない。東西に長軸をとり小判形の楕円形を呈し、北から約80度東に振れる。長径3.70m、短径3.40m、深さ45cmを測る。床面は若干凹凸がみられるが平坦であり、壁は比較的緩く立ち上がる。壁溝は南壁側に部分的に存在し、全周しない。炉は地床炉で、中央部やや西寄りに存在し、浅く窪む。柱穴は6本検出され、深さはP1=17cm、P2=16cm、P3=44cm、P4=45cm、P5=39cm、P6=9cmを測る。P1、P2、P3、P4の4本主柱構造の住居跡と思われる。覆土は、住居跡が深いにもかかわらず、比較的明

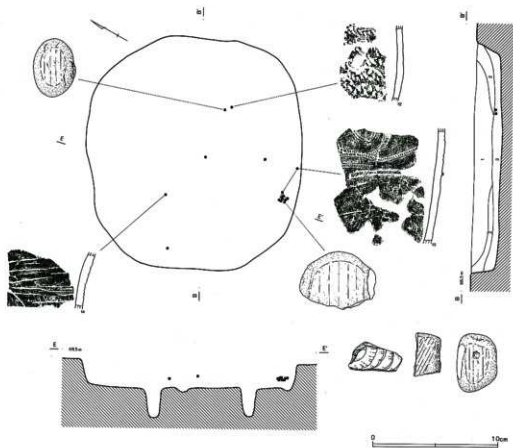


第75図 第7号住居跡

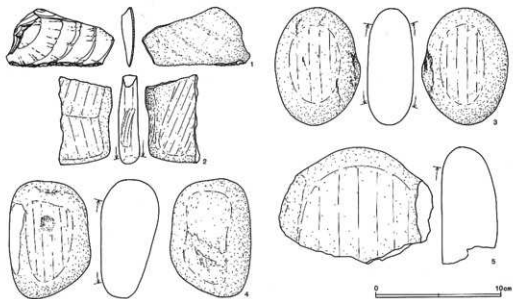
瞭な堆積状態を呈している。1層は厚く、比較的短時間に堆積したもので、ローム粒子を含みしまりの強い黒色土である。2層は住居跡全体を覆う程堆積せず、壁際にのみ堆積した黄褐色土である。3層は黒色土粒子を少量含み、しまり粘性とも強い黄褐色土である。住居跡の所属時期は諸磯b式期である。

遺物は19点出土しており、土器が14点、石器が5点である。遺構が深く、覆土が厚いわりには遺物の出土が少なく、各時期の土器が混在している。

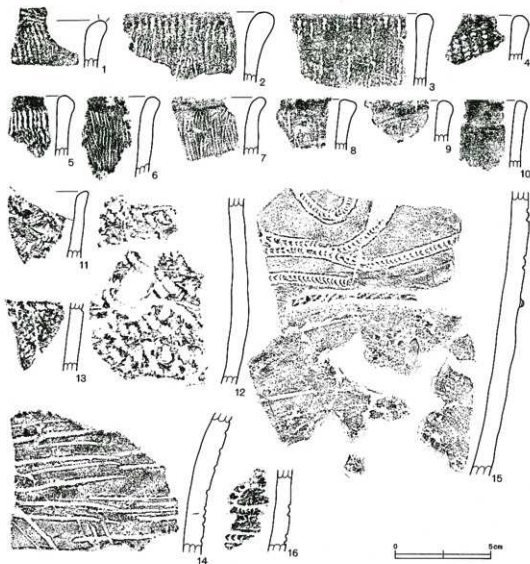
1～10は燃糸文系土器群で、混入品である。1は肥厚する口唇部が開く器形を呈し、口唇部上端に単節RLを施文し、口端部から条の縦走るRLを施文する。井草II式に比定される。2は肥厚する口唇部が開き、口唇部整形後縄文RLを口端部から施文する。3、4は肥厚する口唇部が立つ器形を呈し、3は繊維痕の目立つ単節RLを浅く、4は節の目立つRLを施文する。5は口唇部整形後燃糸Rを口端部から施文する。6、7は口唇部が外反し、口唇下から条線文を施文する。8は肥厚する角頭状口唇部が開き、条線文を施文している。9、10は無文土器である。



第76图 第7号住遺物分布图



第77图 第7号住出土石器



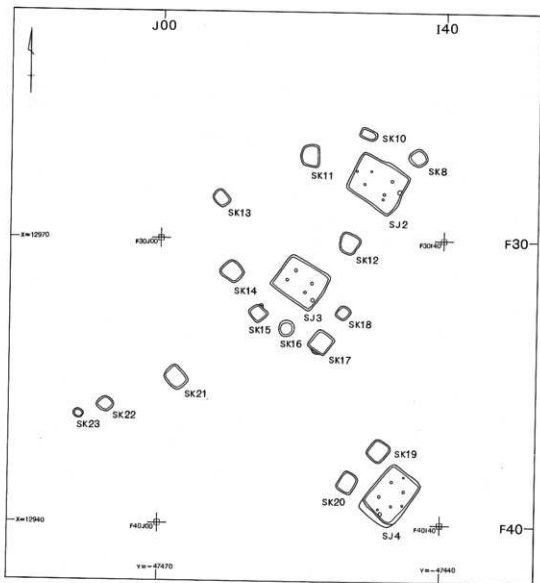
第78図 第7号住出土土器

11、12は繊維を含み、ループ縄文を施文する二ツ木段階の関山式土器である。13は結節沈線文を施文する諸磯a式土器である。14～16は諸磯b式土器である。14は半截竹管の平行沈線文のみで、区画モチーフを描出するものである。15は爪形文で渦巻状のモチーフを描き、文様帯区画に刻みを施した浮線文を使用する。16は15と同一個体である。

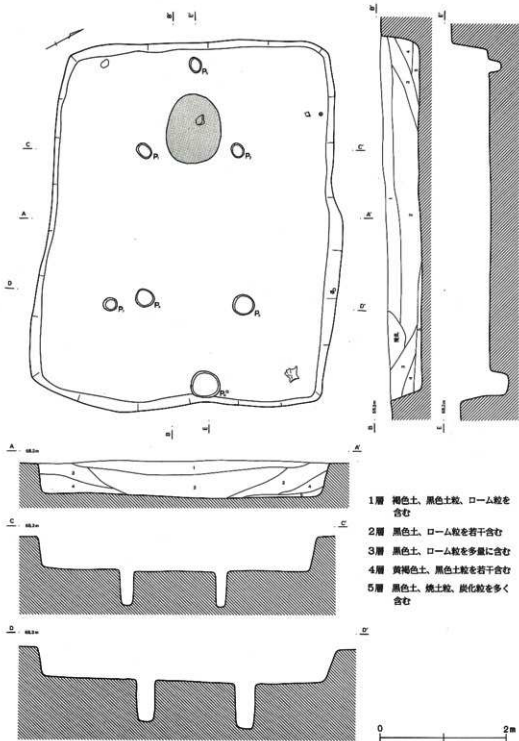
石器は製品が5点出土している。第77図1は縦長剝片を横に使用した搔器である。2は砥石であり、4～5は磨石である。3は両面を、4、5は片面を使用する。3の擦り面には浅い窪みがみられる。

2. 弥生時代の遺構と遺物

四反歩遺跡南地区の弥生時代の遺構は、住居跡3軒、土壇15基が検出されている。これ等の遺構はF2I4区からF3I4区にかけて集中し、土壇も住居跡の周辺を取り巻いて存在しており、出土遺物からも住居跡と土壇との共存性は確かなものである。しかし、住居跡と土壇の組み合わせ関係は、正確には不明である。また、住居跡は全て焼失しているが、家財道具がそのまま残されているという火災住居的な様相を呈する住居跡はなかった。住居跡は焼けているが、土壇には火を受けている痕跡はなかった。これは、上屋構造の存否を意味しているものなのであろうか。



第79図 弥生時代の遺構



- 1層 褐色土、黒色土粒、ローム粒を含む
- 2層 黒色土、ローム粒を若干含む
- 3層 黒色土、ローム粒を多量に含む
- 4層 黄褐色土、黒色土粒を若干含む
- 5層 黒色土、焼土粒、炭化粒を多く含む

第80図 第2号住居跡



第81図 第2号住出土土器

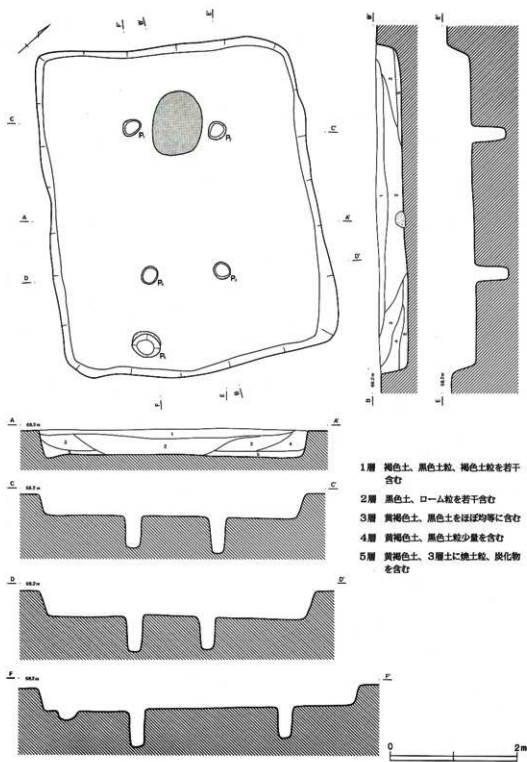
第2号住居跡 (第79図～第81図)

F 2 I 4 区に位置する。周囲に第8号土壌、第10号土壌、第11号土壌、第12号土壌が存在する。土壌は住居跡に付属するものと思われるが、第12号土壌は第3号住居跡との中間に存在するため、どちらに帰属するか判然としない。住居跡は東西方向に長軸をとる長方形を呈するが、北から約50度程西に振れている。長径5.76m、短径4.70m、深さ約65cmを測る。床面は小さな凹凸が存在するが、ほぼ平坦面を呈する。壁は比較的直に立ち上がる。柱穴は7本検出されており、P 1～P 4の4本を支柱とするが、北壁側の中央部付近にもP i tが存在する。深さはP 1=54cm、P 2=56cm、P 3=72cm、P 4=66cm、P 5=20cm、P 6=30cm、P 7=8cmを測る。炉は地床炉で、P 1とP 2の中間の奥壁側に位置する。覆土は5層で構成され、1層が黒色土粒子、ローム粒子を含みややしまりの弱い褐色土、2層がローム粒子を若干含み、しまりの弱い黒色土、3層がローム粒子を多量に含む黒色土、4層が黒色土粒子を若干含みしまりの強い黄褐色土、5層が焼土粒子、炭化材、炭化物粒子を多量に含み、しまり粘性ともに強い黒色土である。住居跡の所属時期は、出土土器から弥生時代後期の吉ヶ谷式期である。

遺物は殆ど出土していない。南東コーナー付近に1個体の甕形土器が出土していたが、盗難にあり紛失している。土器は覆土及び床面に破片が散在していた程度であり、第81図1は台付鉢の脚部である。外面には磨きを施している。2～5は甕形土器の破片で、2は先細りして開く口縁部であり、単節縄文を施文する。3～5は甕形土器の肩部破片で、3、4がRL、5がLRの単節縄文を横位に施文する。

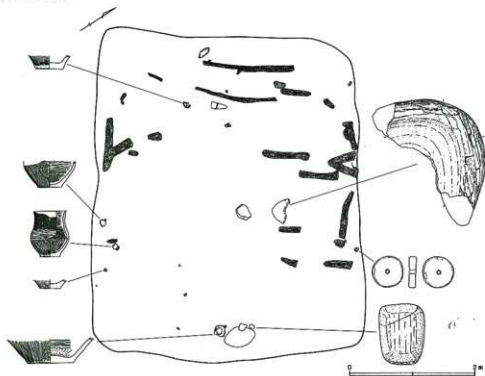
第3号住居跡 (第82図～第85図)

F 3 I 4 区に位置する。周囲に第14号土壌、第15号土壌、第16号土壌、第17号土壌、第18号土壌が取り囲む様に存在する。これ等は住居跡に付属するものと思われるが、北西方向に少し離れて第13号土壌が存在する。また、第2号住居跡との間に第12号土壌が存在する。これ等の帰属については判然としない。第2号住居跡と平行してほぼ同じ方向に軸をとり、一回り小さい長方形を呈し、長径5.20m、短径4.22m、深さ約60cm前後を測る。床面は若干の凹凸が存在するが、おおよそ平坦面を呈する。壁は直に立ち上がる。柱穴は5本検出されており、P 1～P 4の4本支柱の構造である。深さはP 1=50cm、P 2=57cm、P 3=50cm、P 4=56cm、P 5=14cmを測る。炉は地床炉で、第2号住居跡と同様にP 1とP 2の中間で柱穴と奥壁の間に存在する。覆土は5層で構成され、1層が黒色土粒子を含む褐色土、2層がローム粒子を若干含みややしまりの弱い黒色土、3層が黒色土ブロックを均等に含む黄褐色土、黒色土粒子を少量含みしまり、粘性ともに強い黄褐色土、5層が焼土粒子、炭化材、炭化物粒子を多量に含み、しまり粘性の強い黄褐色土である。住居跡の所属時

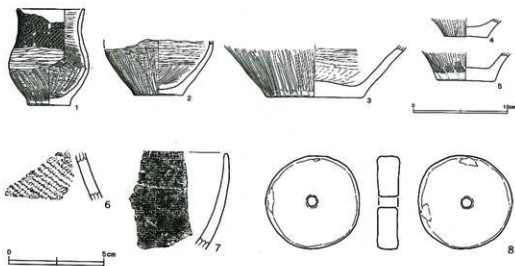


第82図 第3号住居跡

四反歩遺跡南地区



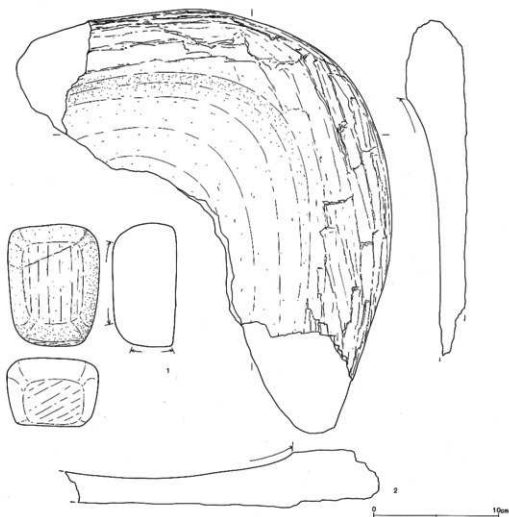
第83図 第3号住居遺物分布図



第84図 第3号住居出土土器

期は弥生時代後期の吉ヶ谷式期である。

住居跡は焼失しているが、遺物は殆ど残されていなかった。壁や床面には太い炭化材が残存し、床面からは石皿や磨石等の石器類と、土器類が若干出土している。第84図1は口縁部を若干残して欠損するものの、胴部は完全に現存する小形の甕形土器である。胴中央部付近まで単節縄文LRを



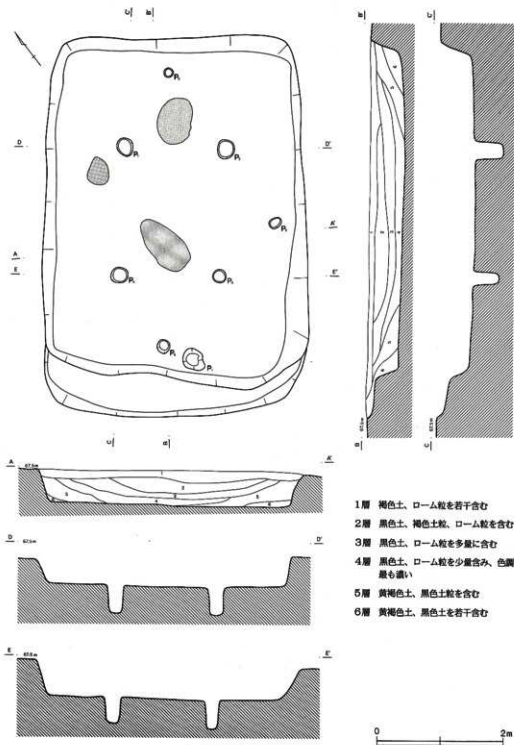
第85図 第3号住出土石器

施文し、胴部に横方向、底部に縦位の磨きを行っている。推定口径5cm、器高10.1cm、底径4.5cmを測る。2～5は壺形土器の底部破片であるが、3は底部の開きが大きいため壺の可能性もある。4は緻密な胎土を持ち、器面整形が他と比べて非常に丁寧であり、底部付近の磨きも底面にまで達している。大きさは2が現存高5.9cm、底径5.1cm、3が底径10.1cm、4が底径4.5cm、5が底径6.1cmを測る。6は単節RLの施文される肩部の破片である。7は鉢形土器の口縁部と思われ、内外面とも丁寧に研磨される。

8は土製の紡錘車である。径5cm、厚さ1.2cmを測る。非常に丁寧な造りで、中央部の径は5mmを測る。

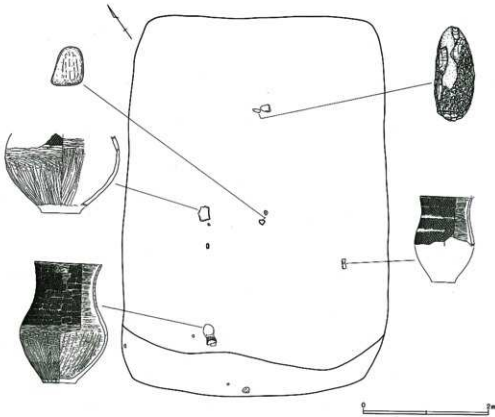
第85図2は半分程欠損するが、緑泥片岩製の石皿である。良く使い込んであるため皿状を呈し、一番薄いところでは1cm程の厚さしか残っていない。1は磨石で、片面を使用する。擦り面は光沢を帯びており、角は擦れて丸くなっている。

四反歩遺跡南地区

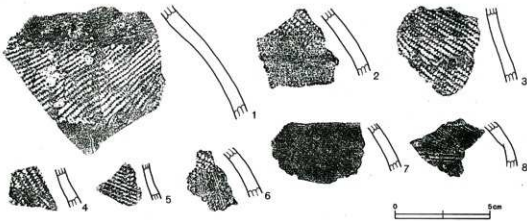


- 1層 褐色土、ローム粒を若干含む
- 2層 黒色土、褐色土粒、ローム粒を含む
- 3層 黒色土、ローム粒を多量に含む
- 4層 黒色土、ローム粒を少量含む、色調最も濃い
- 5層 黄褐色土、黒色土粒を含む
- 6層 黄褐色土、黒色土を若干含む

第86図 第4号住居跡



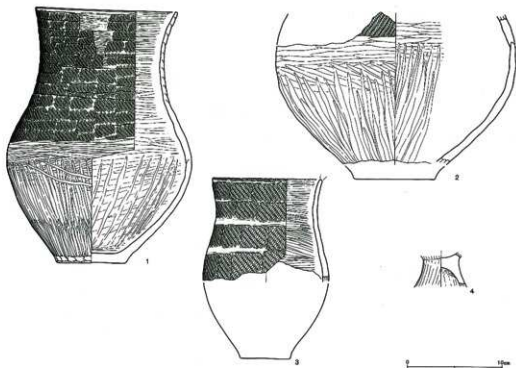
第87図 第4号住遺物分布図



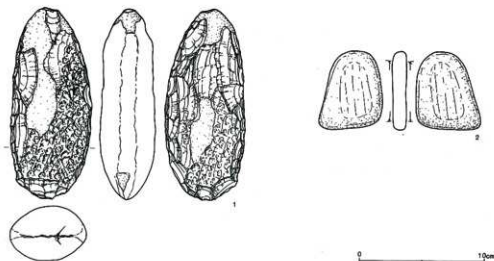
第88図 第4号住出土土器 (1)

第4号住居跡 (第86図～第90図)

F 3 I 4 区に位置する。周囲に第19号土壇、第20号土壇が存在し、住居跡に付属するものと思われる。第2号住居跡、第3号住居跡とは約90度程長軸方向がずれており、南北方向に長軸をとり、



第89図 第4号住出土土器 (2)



第90図 第4号住出土土器

北から約45度東に振れる長方形を呈する。南壁に一段高いテラス状の施設を持ち、長径5.98m、短径4.20m、深さ約60cmを測る。床面はほぼ平坦面を呈し、壁はやや緩く立ち上がる。柱穴は8本検出されており、P1～P4を主柱にする構造である。深さはP1=45cm、P2=44cm、P3=46cm、

P4 = 42cm、P5 = 8cm、P6 = 10cm、P7 = 18cm、P8 = 11cmを測る。炉は地床炉で、P1、P2、P5の間と、P1の南西側と、P3、P4の中間で中央部寄りとの3箇所に炉床が存在する。覆土は6層で構成され、1層がローム粒子を若干含む褐色土、2層がローム粒子を含む黒色土、3層がローム粒子を多量に含む黒色土、4層が色調の最も濃黒い黒色土、5層が黒色土粒子、焼土粒子、炭化物を含みしまりの強い黄褐色土、6層が炭化物、炭化材、焼土粒子を多く含みしまり粘性の強い黄褐色土である。所属時期は弥生時代後期吉ヶ谷式期である。

遺物は器形復元のできる土器が3点、土器片、石器が2点であった。第89図1は南壁の近くで出土した完形土器である。胴下半部が大きく膨らむ壺形土器で、胴中央部まで単節RL縄文を施文し、原体は幅の短いものを使用している。口径15cm、器高22.6cm、底部7.2cm、最大幅19.6cmを測る。3は胴下半を欠損する壺形土器であるが、胴部まで縄文RLを施文する。原体は比較的長く、施文幅もやや広くなる。口径11.6cm、現存高10.7cmを測る。2は壺形土器の胴部破片であり、単節LR縄文施文部が一部残る。4は台付き鉢の脚部と思われる。第88図1は壺形土器の胴部であり、単節LR縄文が帯状に施文されている。2～6は壺形土器の胴部破片で、単節RLが施文される。7、8は無文の胴部破片である。

石器は第90図1が磨製石斧の未製品で、調整剝離後に敲打痕を全面に施している。2は砥石であり、両面が使用されている。

弥生時代の土壌にみられる土層は殆どが共通するものであり、ここではとりまとめて統一番号で示した。層は以下の5層が確認された。

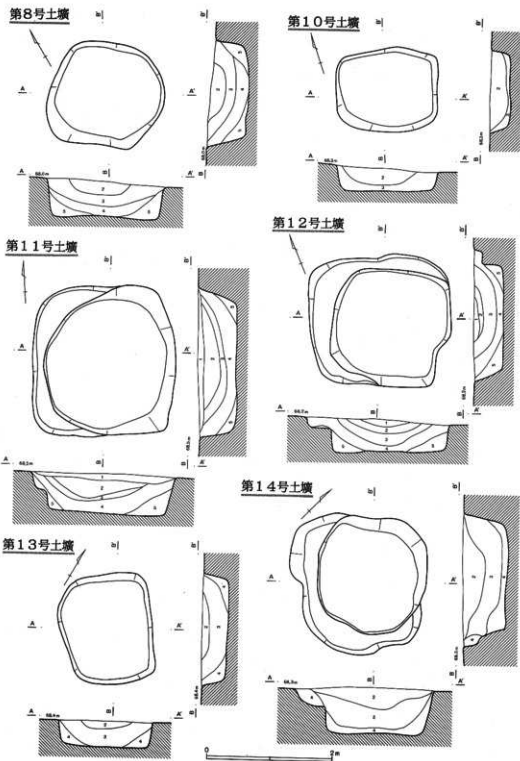
- 1層、褐色土、砂粒とローム粒子を若干含む。しまりは強いが、粘性に欠ける。
- 2層、暗褐色土、ローム粒子を少量含む。しまりは弱く、粘性に欠ける。
- 3層、黒色土、ロームブロックを斑に含む。しまりやや弱く、粘性に欠ける。
- 4層、黒色土、ロームブロックを均等に含む。しまりは強いが、粘性がやや弱い。
- 5層、黄褐色土、黒色土粒子を少量含む。しまり、粘性ともに強い。

第8号土壌 (第91図)

F2I4区に位置する。第2号住居跡の北側に隣接し、北東方向に第10号土壌が存在する。方形を基本とした不整形円形を呈する。長径1.86m、短径1.62m、深さ65cmを測る。覆土は2層～5層で構成され、整然としたレンズ状堆積を示す。底面は若干凹凸があり、壁は直に立ち上がる。遺物は出土していない。

第10号土壌 (第91図)

F2I4区に位置する。第2号住居跡の北西コーナーの北に隣接する。住居跡の軸とほぼ同じ北西方向に軸をとり、長方形を呈する。長径1.62m、短径1.34m、深さ42cmを測る。覆土は2層、3層で構成される。底面は平坦面を呈し、壁はやや緩く立ち上がる。遺物は出土していない。



第91図 弥生時代の土坑 (1)

第11号土壌 (第91図)

F 2 I 4 区に位置する。第2号住居跡の北西方向約4mのところ存在する。テラス状の段を持ち、開口部ではほぼ方形、底面で不整形円形を呈する。長径2.36m、短径2.30m、深さ68cmを測る。覆土は1層～5層で構成され、整然としたレンズ状堆積を呈する。底面は平坦面を呈し、壁はやや緩く立ち上がる。遺物は出土していない。

第12号土壌 (第91図)

F 2 I 4 区～F 3 I 4 区にかけて位置する。第2号住居跡と第3号住居跡との中間に存在する。北壁から西壁にかけてテラス状の段が存在し、ほぼ方形を呈する。長径1.74m、短径1.46m、深さ54cmを測る。覆土は1層～5層で構成され、整然としたレンズ状堆積を呈する。底面は若干凹凸が存在し、壁は直に立ち上がる。遺物は出土していない。

第13号土壌 (第91図)

F 2 I 4 区に位置する。第3号住居跡の北西約10mのところ存在する。ほぼ長方形を呈し、長径1.74m、短径1.46m、深さ42cmを測る。覆土は2層～4層で構成される。底面は平坦面で、壁は直に立ち上がる。遺物は出土していない。

第14号土壌 (第91図)

F 3 I 4 区に位置する。第3号住居跡の西に存在し、方形の不整形円形を呈する。西壁から南壁にかけてテラス状の段が存在する。長径2.20m、短径2.16m、深さ74cmを測る。覆土は2層～4層で構成される。底面は若干凹凸が存在し、壁はやや緩く立ち上がる。遺物は出土していない。

第15号土壌 (第92図)

F 3 I 4 区に位置する。第3号住居跡の南西に存在し、東隣りに第16号土壌が存在する。長楕円形を呈し、長径1.86m、短径1.56m、深さ41cmを測る。覆土は1層～4層で構成される。底面は凹凸が存在し、壁は緩く立ち上がる。遺物は出土していない。

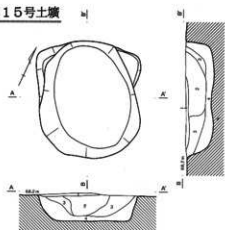
第16号土壌 (第92図)

F 3 I 4 区に位置する。第3号住居跡の南に存在し、西に第15号土壌、東に第17号土壌が存在する。隅丸の方形を呈し、長径1.56m、短径1.48m、深さ43cmを測る。覆土は3層、4層で構成されるが、3層が主体を占める。底面は平坦で、壁はやや緩く立ち上がる。遺物は出土していない。

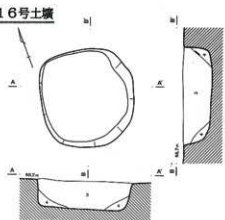
第17号土壌 (第92図、第94図3、第95図1～4)

F 3 I 4 区に位置する。第3号住居跡の南に存在し、北西に第16号土壌、北東に第18号土壌が存在する。ほぼ方形を呈し、長径2.56m、短径2.50m、深さ42cmを測る。覆土は1層～4層で構成される。底面は若干凹凸が存在し、壁はやや緩く立ち上がる。第94図3は瓶の完形品である。口縁が

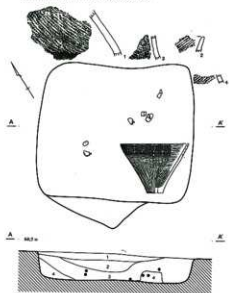
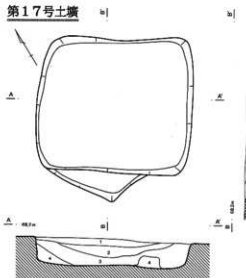
第15号土坑



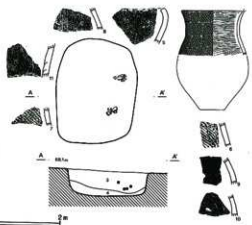
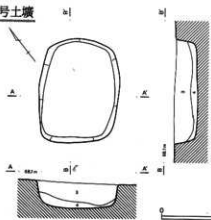
第16号土坑



第17号土坑

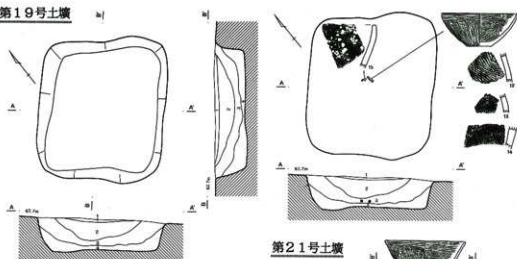


第18号土坑

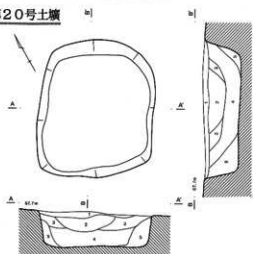


第92図 弥生時代の土坑 (2)

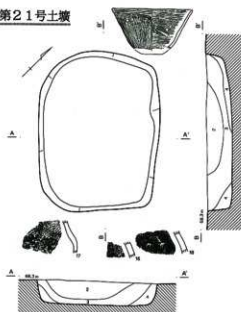
第19号土坑



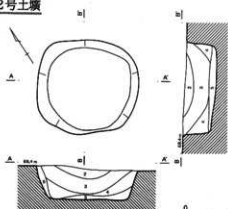
第20号土坑



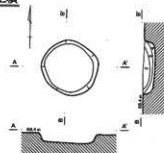
第21号土坑



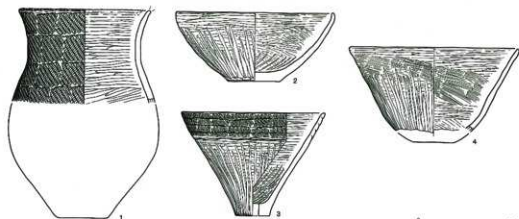
第22号土坑



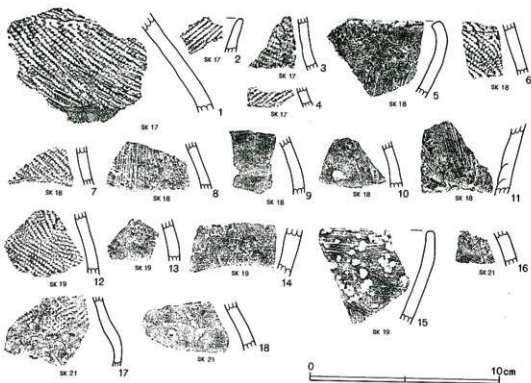
第23号土坑



第93図 弥生時代の土坑 (3)



第94図 弥生時代土壇出土土器 (1)



第95図 弥生時代土壇出土土器 (2)

開く鉢形を呈し、口縁部に単節RLを施文する。口径15.2cm、器高10.9cm、底径3.6cmを測り、径1.2cmの単孔が開く。第95図1は壺形土器の胴部破片で、単節RLを施文する。2～4は甕形土器の破片で、2、4がLR、3がRLの縄文を施文する。

第18号土壇 (第92図、第94図1、第95図5～11)

F3I4区に位置する。第3号住居跡の南東に存在し、北に第12号土壌、南西に第17号土壌が存在する。隅丸の長方形を呈し、長径1.66m、短径1.28m、深さ38cmを測る。覆土は3層、4層で構成される。底面は平坦面を呈し、壁はやや緩く立ち上がる。第94図1は甕形土器の胴上半部である。原体幅の長い単節RLを胴中央部まで施文する。推定口径14cm、現存高9.7cmを測る。第95図5は鉢形土器の口縁部と思われ、角頭状の口唇部が内湾する。6、7は甕形土器の胴部破片で単節RLを施文する。8、11は刷毛目がみられ、他は無文で、器種は不明である。

第19号土壌 (第93図、第94図2、第95図12~15)

F3I4区に位置する。第4号住居跡の北西に存在し、住居跡と同じ北東方向に長軸をとる。隅丸の長方形を呈し、長径2.18m、短径2m、深さ42cmを測る。覆土は1層~4層で構成される。底面は凹凸が存在し、壁はやや緩く立ち上がる。第94図2は口縁の内湾する無文の鉢形土器であり、推定口径16.7cm、器高7.3cm、底径5.4cmを測る。第95図12~14は甕形土器の胴部破片で、12は単節RLを施文する。15は鉢形土器の口縁部破片で、口縁部が若干内湾する器形を呈する。

第20号土壌 (第93図)

F3I4区に位置する。第4号住居跡の西に存在し、住居跡と同じ北東方向に長軸をとる。隅丸の長方形を呈し、北東のコーナーがやや丸味を帯びている。長径2.20m、短径1.84m、深さ62cmを測る。底面は平坦面を呈し、壁は比較的直に立ち上がる。覆土は1層~5層で構成され、整然としたレンズ状堆積を呈する。遺物は出土していない。

第21号土壌 (第93図、第94図4、第95図16~18)

F3I4区に位置する。第3号住居跡の南西、第4号住居跡の北西方向に存在し、どちらの所属とも判然としない。ほぼ長方形を呈し、北西、南西のコーナーがやや丸味を帯びる。長径2.52m、短径1.96m、深さ44cmを測る。底面は平坦面を呈し、壁は直に立ち上がる。覆土は2層~4層で構成される。第94図4は口縁の開く無文の鉢形土器である。約半周と底部を欠損する。表裏面とも一部に刷毛目が残り、磨きと相前後している。第95図17は小形の甕形土器で、単節LRを施文する。16、18は無文の胴部破片で、甕形土器の胴部と思われる。

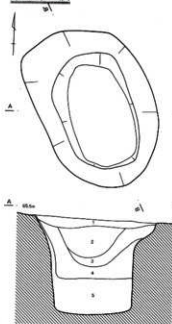
第22号土壌 (第93図)

F3J0区に位置する。西に第23号土壌、北東に第21号土壌が存在するが、住居跡からはかなりの距離を置いている。円形に近い隅丸方形を呈し、長径1.62m、短径1.50m、深さ34cmを測る。底面は平坦面を呈し、壁は直に立ち上がる。覆土は2層~5層で構成され、整然とした自然堆積状態を呈している。遺物は出土していない。

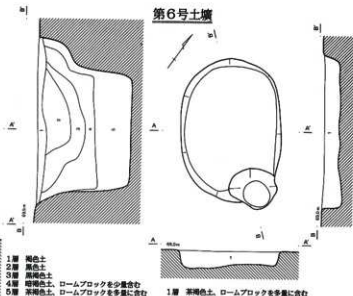
第23号土壌 (第93図)

F3J0区に位置する。東に第22号土壌が存在するが、本土壌が最も西に位置している。ほぼ円

第5号土坑



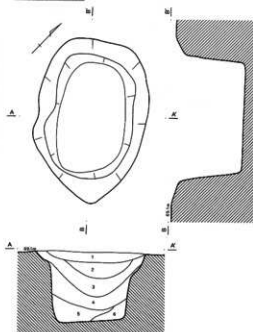
第6号土坑



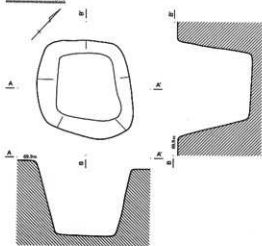
- 1層 褐色土
- 2層 黒色土
- 3層 黒褐色土
- 4層 暗褐色土、ロームブロックを少量含む
- 5層 茶褐色土、ロームブロックを多量に含む

- 1層 茶褐色土、ロームブロックを多量に含む

第36号土坑



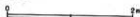
第7号土坑



第40号土坑



- 1層 褐色土
- 2層 黒色土
- 3層 黒褐色土
- 4層 暗褐色土、ロームブロックを少量含む
- 5層 茶褐色土、ロームブロックを多量に含む
- 6層 暗黄褐色土、しまり粘性强し



第96図 時期不詳の土坑

形を呈し、長径0.92m、短径0.88m、深さ18cmを測る。底面は平坦面を呈し、壁は直に立ち上がる。覆土は2層～4層で構成される。遺物は出土していない。

3. 時期不詳の土壌

四反歩遺跡南地区では、遺物の出土もなく、形状、土層等の類似性及び特徴もなく、所属時期を特定するのが困難な土壌が5基存在している。包含層からは、縄文時代、弥生時代の他に中・近世の遺物も出土していることから、所属時期の把握がなお困難な状況を示している。また、隣接する東地区では奈良時代の住居跡が検出されていることから、これらの時期の土壌と思われるものも存在している。ここでは、無理に時期を限定せず、時期不詳として一括して扱うことにした。

第5号土壌 (第96図)

E4J1区に位置する。開口部が開く土壌出、いわゆる落とし穴状を呈する。長軸を北西方向にとり、長径2.68m、短径1.82m、深さ1.78mを測る。覆土は1層が褐色土、2層が黒色土、3層が黒褐色土、4層が暗褐色土、5層が茶褐色土である。遺物は出土しないが、形状から縄文時代前期の落とし穴の可能性はある。

第6号土壌 (第96図)

F0J2区に位置する。楕円形を呈し、長径2.28m、短径1.60m、深さ30cmを測る。覆土は茶褐色土の1層である。

第7号土壌 (第96図)

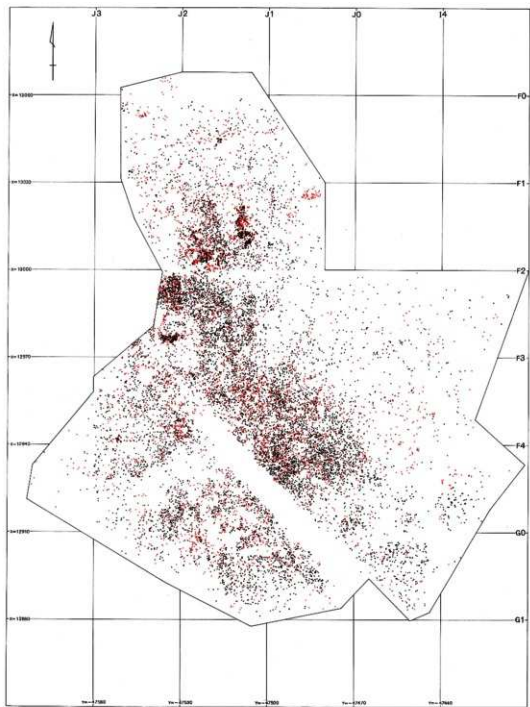
F1J2区に位置する。方形を呈し、長径1.52m、短径1.49m、深さ1.09mを測る。覆土はロームブロックを主体とし、脆くボソボソの黄褐色土である。

第36号土壌 (第96図)

E4J1区に位置する。第5号土壌とほぼ同じ形状、覆土を呈し、軸方向も揃うため、同時期の所産と思われる。長径2.62m、短径1.74m、深さ1.14mを測る。本土壌と第5号土壌は同じ等高線上の斜面に、同じ軸方位を持ち、縄文時代前期の落とし穴の可能性が高い。

第40号土壌 (第96図)

F2J1区に位置する。ほぼ長方形を呈し、長径1.02m、短径0.66m、深さ14cmを測る。燃糸文期の遺構の周辺に存在するため、縄文期所産の可能性が高い。



第97図 遺物分布全体図

4. 包含層出土の遺物

四反歩遺跡南地区からは約20000点以上の遺物が出土している。遺物は土器片が約12000点、石器片が約8000点を数える。土器の大半は燃糸文系土器群で9割以上を占めており、石器群も同様の比率で燃糸文期に位置付けられるものと思われる。遺物のドット処理を行った点数が約20000点であるが、グリッド単位で取り上げたもの、表面採集品等を含めると、20000点を大きく上回る量の遺物が出土したことになる。

(1) 出土土器

出土土器は大きな時期分けを群で行い、型式レベル及び一つの特徴で纏まる土器群を類で分類した。その下位を種で分類し、さらにa、b、c…で分類した。従って、種のレベルでは分類基準が一定していない。基本的には口縁部を主体に分類した。

第Ⅰ群土器…燃糸文系土器群

第Ⅱ群土器…沈線文系土器群

第Ⅲ群土器…条痕文系土器群

第Ⅳ群土器…前期の土器群

第Ⅴ群土器…中・後期の土器群

燃糸文系土器群を分類するにあたり、まず、原体を優先し、次に口唇部形態と器形、最後に整形を分類の基準とした。類似する器形、整形で、原体のみ異なるものがあるが、施文原体を最下位の分類基準とした場合は本来同類に分類されるべきであるが、ここでは燃糸文系土器群の中の第Ⅲ様式と第Ⅳ様式を主体とするため、より細かな分類を行う必要があり、原体別に検討することの有効性を考慮して異種原体の混淆する繁雑な分類を避けた。

第Ⅰ群土器 (第100図～第137図)

燃糸文系土器群を一括する。施文原体で以下の5類に分類した。

第1類土器 (第100図～第111図)

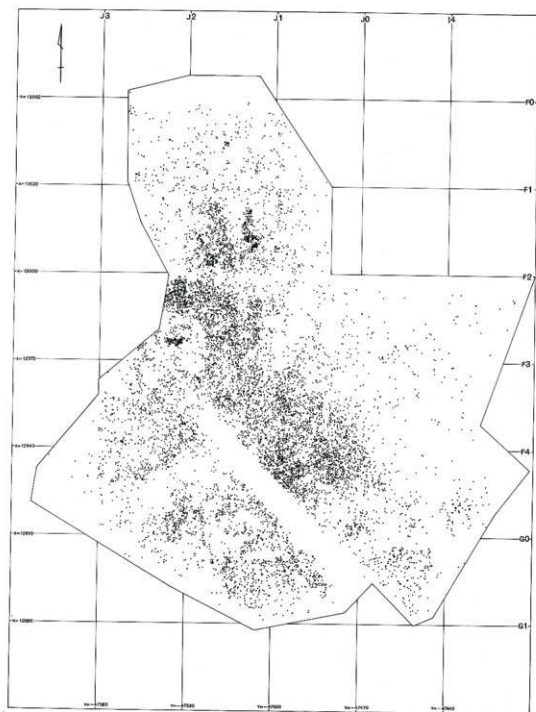
縄文を施文するものを一括する。

第1種 (第100図1)

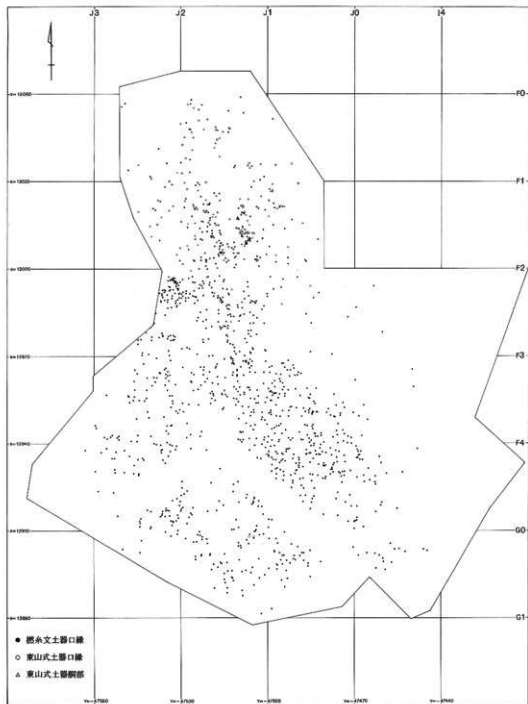
1点のみ出土した。口唇部文様帯、口縁部文様帯、胴部文様帯を持つ井草Ⅰ式土器である。やや肥厚する口唇部が大きく外反する器形を呈し、口唇下に成形時に付けられた指頭押痕を残す。口唇部の上端と外端に単節RLを2段に施文するため口端部は角頭状を呈し、口縁部には横位施文による斜縄文を施文し、胴部には斜位施文で条の縦走する単節RLを施文する。胎土に砂粒、小礫を多く含み、赤褐色を呈する堅緻な土器である。

第2種 (第100図2～10、第138図1)

口唇部文様帯と胴部文様帯を持つものを一括する。肥厚丸頭状口唇部が開く器形を呈し、口唇部上端に1段縄文を施文し、口端部から条の縦走する縄文を施文する。原体は全て単節RLで、細か



第98图 出土土器全体图



第99図 燃系文土器群分布図

四反歩遺跡南地区

な縄文を整然と施文する。整形と施文の関係は、口唇部整形→口唇部上端施文→口端部から胴部施文の順である。2～5は同一個体と思われ、細砂粒を含むが緻密で、明橙褐色を呈する土器である。井草Ⅱ式に比定されると思われるが、第3種土器と近似する。

第3種（第100図11～19、第138図3）

口唇部文様帯と胴部文様帯を持つものを一括する。肥厚丸頭状口唇部がやや開く器形を呈し、第2種程明瞭ではないが口唇部上端から外端にかけて縄文を横位施文し、口端部から条の縦走する縄文を施文するものである。整形と施文の関係は、口唇部整形→口端部から胴部への縄文施文→口端部施文の順である。11、12は同一個体である。口端部に稜が付くほど強く明瞭に単節RLを1段施文する。原体は全て単節RLで、やや暗い赤褐色を呈するものが多い。

第4種（第100図20～33、第101図1～10）

口縁部に異方向の施文を行うものを一括した。第3種の口端部施文よりもやや下位に施文が移り、口端部から口唇部直下にかけて横位施文するものである。口唇部には肥厚丸頭状のものと、無肥厚角頭状のものがあり、いずれもやや開く器形を呈する。口縁部への異方向施文は幅狭なものを主体とし、整形と施文の関係は口唇部整形→口端部から胴部への縄文施文→口縁部異方向施文の順である。原体は全て単節RLである。

第5種（第101図11～16）

口縁部に異方向施文を行うものであるが、胴部施文との間に無文部を設けるものと、口縁部施文帯が幅広くなるものを一括する。前者の間隔を開けて施文するもの（11～13）は、丸頭状口唇部が肥厚するが、後者の幅広施文のものは無肥厚の角頭状を呈する。整形と施文の関係は口唇部整形→胴部への縄文施文→口縁部異方向施文の順と思われるが、無文部を挟む前者では胴部縄文と口縁部異方向施文との関係は不明である。原体は全てRLである。

第6種（第101図17～36、第102図1～26、第138図4）

胴部文様帯のみの土器群である。肥厚丸頭状口唇部がやや外反もしくは開く器形を呈し、口端部から縄文を施文するものである。整形と施文の関係は口唇部整形→縄文施文である。口端部から口縁部にかけて異方向施文を行う部分に、異方向施文を行わず胴部と同じ縦走縄文を施文するものである。土器としての特徴は第3種と類似し、異方向施文の有無を以て分類される。原体は大半が単節RLであるが、第102図24～26はLRである。

第7種（第102図27～34、第103図、第104図1～17）

肥厚丸頭状口唇部が開く器形を呈し、外反するものが少なくなる。口唇外端部から縄文を施文するが、整形と施文の関係は縄文施文→口唇部整形の順となる。第6種とは施文と整形の関係が逆転する。口唇部の整形範囲も、第6種より広くなる。器形的には若干内彎気味に開くものが存在する。縄文はやや節が大きくなる傾向にあり、施文も粗くなるものが含まれる。原体は単節RLが圧倒的に多く、第104図13～17はLRである。

第8種（第104図18～31）

大きく肥厚する丸頭状口唇部が開く器形を呈し、浅くて薄い縄文を施文するものを一括する。非常に特徴的な土器で、胎土に長石、石英類の砂粒を多く含み、暗褐色のものが多い。原体は単節R

Lが殆どである。整形と施文の関係は縄文施文→口唇部施文と思われる。口唇部整形は丁寧に行われる。

第9種 (第104図32～45)

肥厚丸頭状口唇部がやや開くか立つ器形を呈し、口唇部下から縄文を施文するものである。口唇部は全面磨き状の整形を施し、その下位から縄文を施文する。整形と縄文が直接切り合う部分が少ないため整形と施文の関係は不明瞭であるが、胴部縄文→口唇部整形が一般的と思われる。

第10種 (第105図1～9)

肥厚及び若干肥厚する角頭状口唇部が開く器形を呈し、口端部から縄文を施文するものを一括する。角頭状の口唇部であるが、肥厚度合の少ないものも含めた。整形と施文の関係は口唇部整形→口端部からの縄文施文の順であり、肥厚丸頭状口唇部の第6種に対応する施文テクニックで、本種の方がやや縄文が大きくなり、施文も粗い傾向にある。

第11種 (第105図10～22)

肥厚もしくは若干肥厚する角頭状口唇部がやや開く器形を呈する。器形的には第10種と同様であるが、整形と施文の関係は縄文施文→口唇部整形と逆転する。これは、肥厚丸頭状口唇部の第7種に対応する。

第12種 (第105図23～28)

肥厚丸頭状口唇部が立ち気味にやや開き、口唇下に幅広の緩い括れ帯を持つ器形を呈する。縄文は口唇部下から施文するが、括れ帯には縄文を施さない。これは縄文を器面に対して緩く施文するため、括れ部にまで施文が届かないものと判断される。整形と施文の関係は胴部整形→口唇部下の縄文施文→口唇部整形となる。

第13種 (第105図29～38)

無肥厚丸頭状口唇部が外反して開く器形を呈し、口唇端部から縄文を施文するものである。整形と施文の関係は口唇部整形→口端部からの縄文施文である。縄文は比較的細かく整然と施文されるもので、口端部の施文開始部分ではやや斜行縄文となるものも存在する。第6種とほぼ同様相を呈し、相違は口唇部の肥厚の有無である。

第14種 (第105図39～42、第106図1～11)

無肥厚丸頭口唇部が直線的にやや開くか立つ器形を呈し、口唇端部から縄文を施文する。整形と施文の関係は口唇部整形→口端部からの縄文施文である。この点では第13種と同様であるが、本種は口唇部が立つ器形であり、それに伴って口唇部が内削状を呈したり、内面整形が丁寧になったりしている。

第15種 (第106図12～39)

無肥厚丸頭口唇部が直線的にやや開くか立つ器形を呈し、口唇端部から縄文を施文するものであり、第14種に類似するが、整形と施文の関係が逆転するものである。本種は口唇部からの縄文施文→口唇部整形の順になる。口唇部は角の取れた角頭状を呈するものもあり、内削状のものも含まれる。縄文施文法も多種多様となる。

四反歩遺跡南地区

第16種 (第106図40~43)

口唇部が内彎して立つ器形を呈するものを一括する。口唇部は無肥厚丸頭状を基本とするが、やや肥厚するもの、やや角頭状に近いものも存在する。整形と施文の関係は切り合う部分がなく判然としないが、縄文施文→口唇部整形と思われる。縄文は条が縦走する整然としたものではなく、斜縄文に近いもので、粗く施文されるのを特徴とする。

第17種 (第107図1~5)

無肥厚か若干肥厚する口唇部がやや開く器形を呈し、口唇部からやや間隔を開けて無文部を設定する土器群を一括する。無文部は明確に区画されるものではなく、縄文施文開始部が口唇部から間隔を置いているものである。整形と施文の関係は胴部整形→縄文施文→口唇部整形であるが、中には4、5の様に縄文施文後、口縁部の無文部に撫で整形を施すものもある。

第18種 (第107図6~24、第108図~第111図1~15)

胴部破片を一括する。縄文の種類で大別される。

- a. (第107図6~24、第108図、第109図) 節の明瞭な縄文を施文するものを一括した。大半が節の小さい縄文で、原体は単節RLを主体とする。第109図25~37は単節LRであり、38は節が大きく、繊維痕の明瞭な単節RLである。
- b. (第110図~第111図1~15) 節が不明瞭で、繊維痕が明瞭な縄文を一括する。原体は単節のRLが大半であり、無節に近い縄文では、無節との識別が困難である。無節縄文は殆どないものと思われる。第110図1~19は大粒の縄文で、22~33、第111図1~15は小粒の縄文である。
- c. (第111図16~18) 複節の縄文を一括する。16~18は同一個体であり、底部付近の破片で、複節RLRを縦走する様に施文する。

第19種 (第111図19~22)

底部を一括する。底部は尖底というよりも丸底に近い形状を呈し、20には同心円状の線状痕がついている。いずれも底部まで縄文が施文されている。

第2類土器 (第112図~第128図)

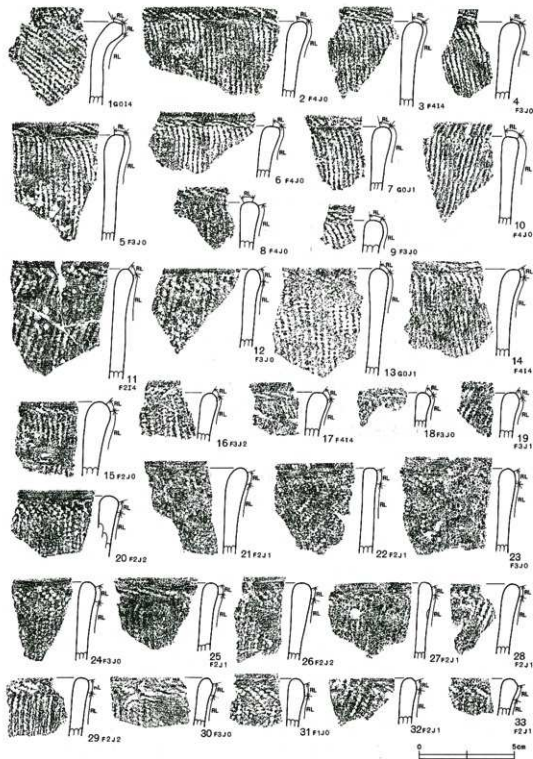
燃糸文を施文するものを一括する。

第1種 (第112図1)

1点のみ出土した。口唇部上端に燃糸文を施文するもので、井草Ⅱ式に比定される。角頭状を呈する口唇部が外反する器形を呈し、口唇下に燃糸文の原体を1条押圧するものである。燃糸文は口唇部上端に口唇に平行して施文し、原体はRである。口縁部の絡条体圧痕の原体はRである。白色粒子、細砂粒を含む緻密な胎土で、赤褐色を呈する。

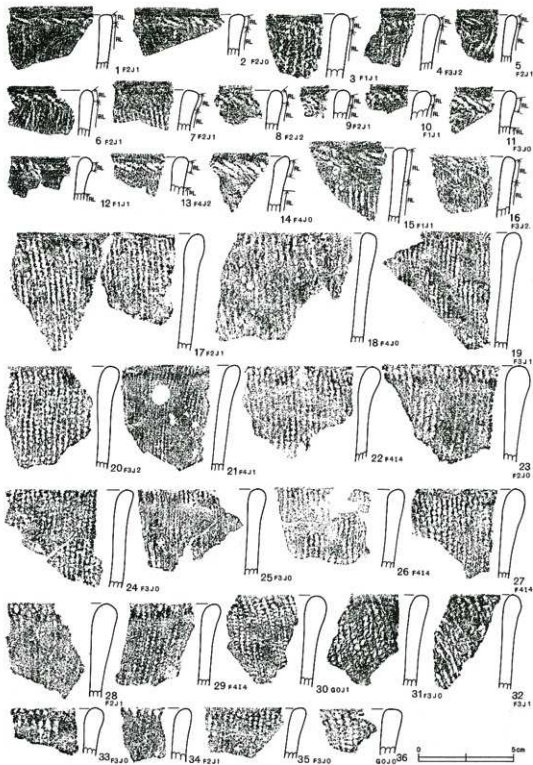
第2種 (第112図2、3、第138図2)

口縁部に燃糸文原体の側面圧痕文を施すもので、口唇部外端に燃糸文を施文するものである。2、3は同一個体である。先細りする丸頭状口唇部が外折し、口縁部がやや内彎気味に立つ器形を呈する。口唇部は側面圧痕文を境にして外折し、口縁部内面に稜を持つ。内面には指頭整形痕が残る。燃糸文はRで、口唇部外端に斜位に、胴部に縦位に施文する。燃糸文原体の側面圧痕文は、切り合

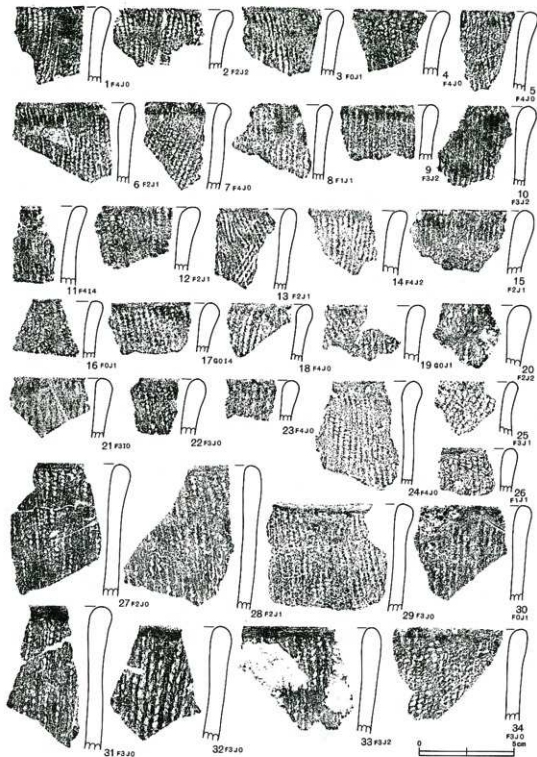


第100図 グリッド出土土器 (1)

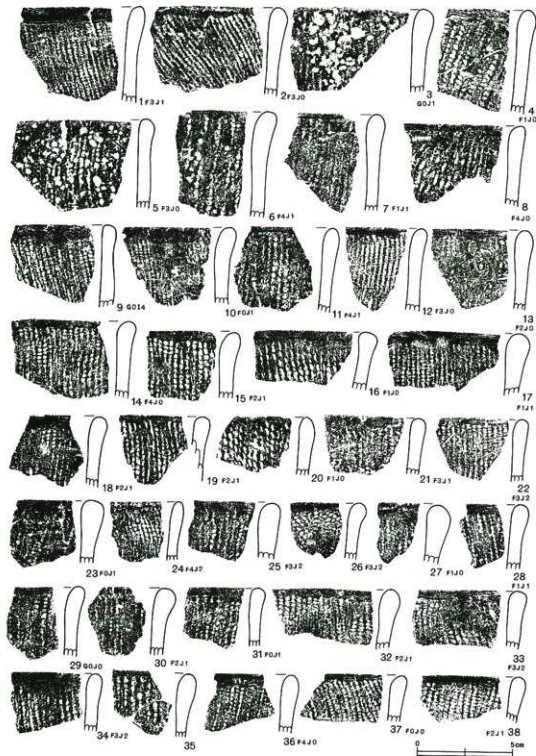
四反歩遺跡南地区



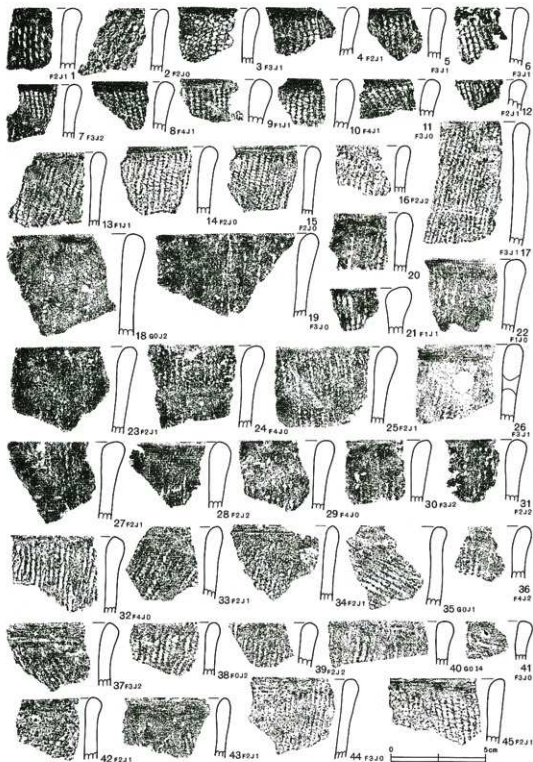
第101図 グリッド出土土器 (2)



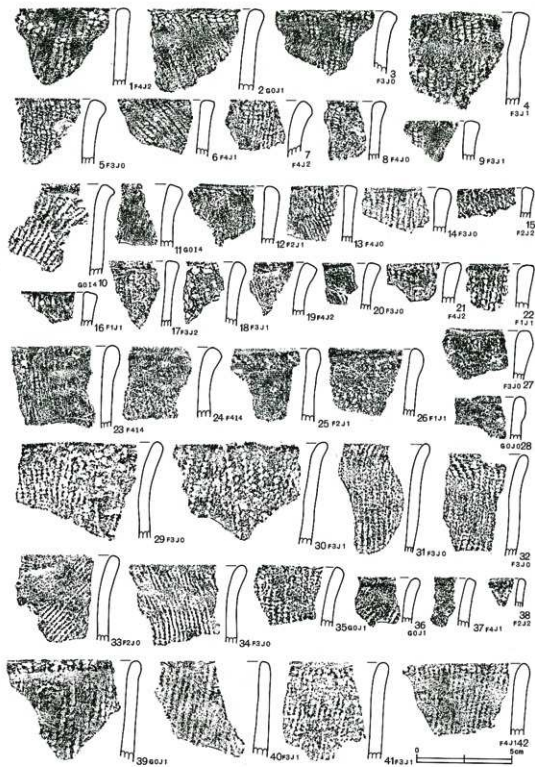
第102図 グリッド出土土器 (3)



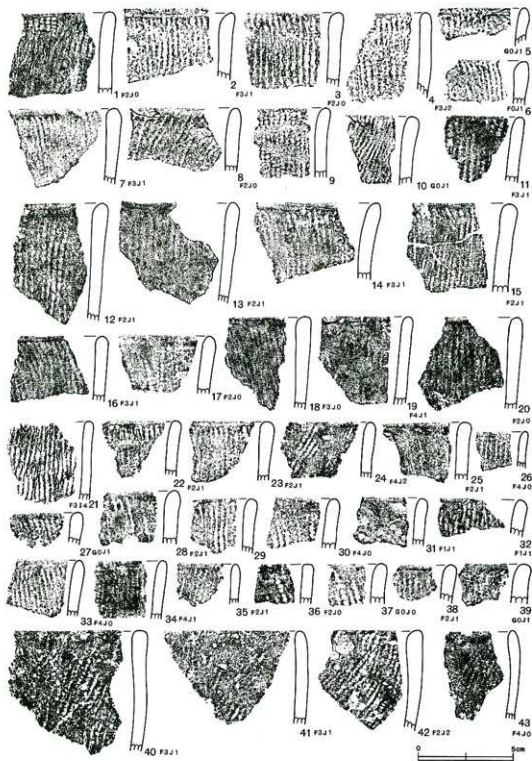
第103図 グリッド出土土器 (4)



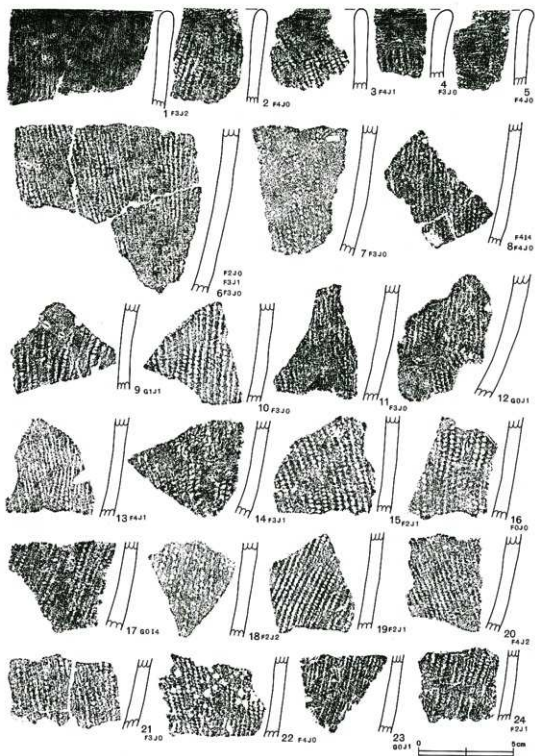
第104図 グリッド出土土器 (5)



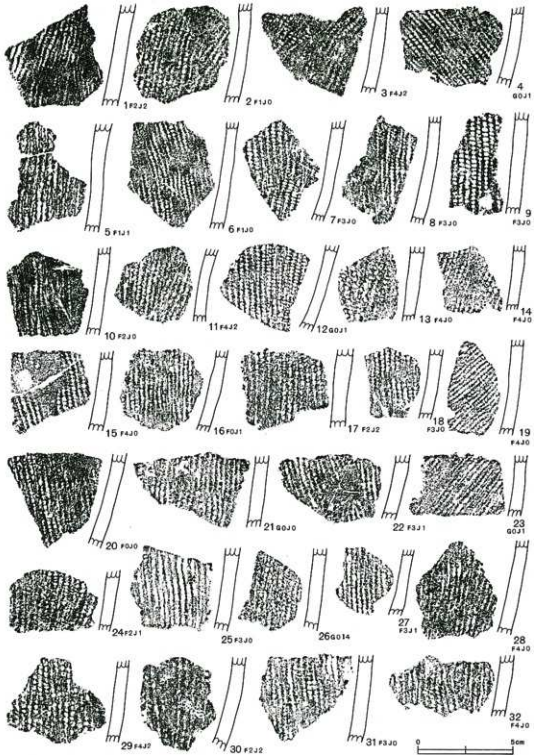
第105図 グリッド出土土器 (6)



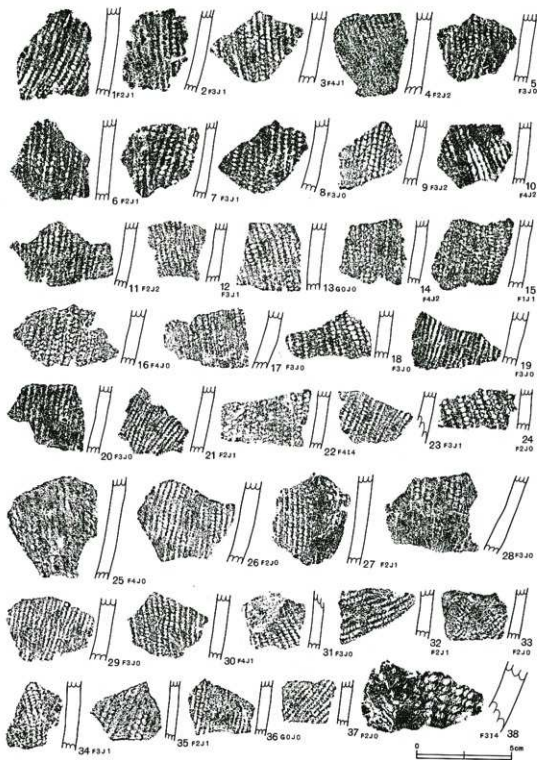
第106図 グリッド出土土器 (7)



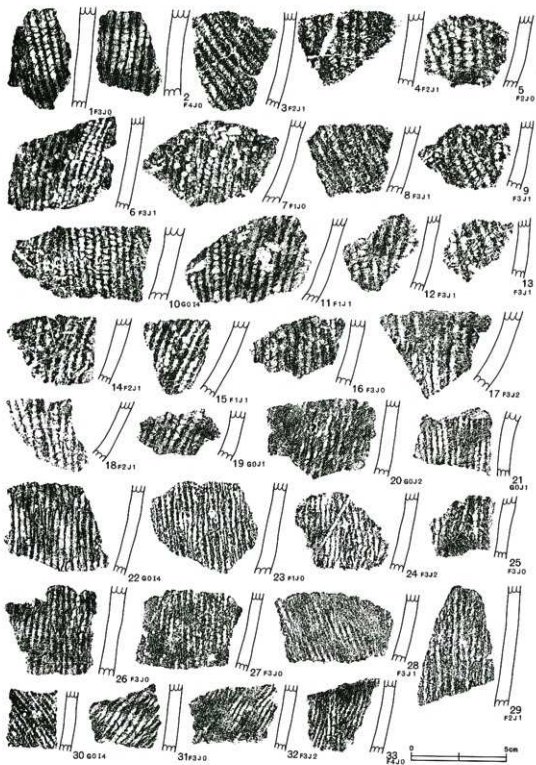
第107図 グリッド出土土器 (8)



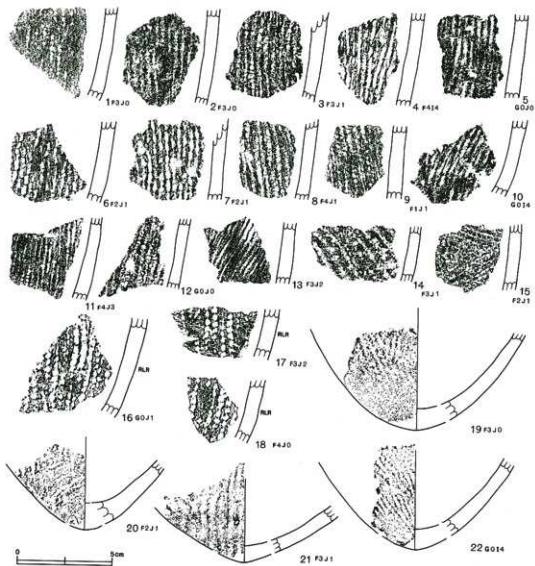
第108図 グリッド出土土器 (9)



第109図 グリッド出土土器 (10)



第110図 グリッド出土土器 0D



第111図 グリッド出土土器 (II)

い関係が不鮮明であるが、胴部燃糸文施文後、押圧施文していることが観察される。

第3種 (第112図4、8)

口唇部上端面に燃糸文を施文するものを一括する。4は口唇部が捲れて肥厚し、やや開き気味に立つ器形を呈する。燃糸文は口唇部上端から外端にかけて口唇と平行に施文し、胴部は口唇下から施文する。燃糸文はRで、やや状の太いものである。8は肥厚角頭状口唇部が開く器形で、口唇部上端に浅く燃糸Rを施文し、口端部からはやや太いRをやや斜位に施文する。

第4種 (第112図5～7、9～13)

口縁部に燃糸文を異方向施文する土器群を一括する。肥厚丸頭状口唇部が開く器形を呈し、口唇

外端部から口縁部にかけて横位の燃糸文を施文し、以下縦位の燃糸文を施文するものである。整形と施文の関係は胴部施文と口唇部整形の関係は不明瞭であるが、胴部燃糸文施文→口縁部異方向施文の順となる。原体はいずれもRで、5、6は胴部より太い原体を施文している。11は口唇部の肥厚部分が広く、異方向施文幅も広がっている。9、10、12、13は横位というよりも斜位の燃糸文を口唇部外端に幅狭く施文する。

第5種 (第122図14~45)

肥厚丸頭状口唇部が外反して開く器形を呈し、口唇外端部から燃糸文を施文するものを一括した。整形と施文の関係は口唇部整形→口唇部外端からの燃糸文施文の順である。燃糸文は口端部から施文するものの、口端部では縦位ではなくやや斜位に施文するものがある。また、比較的細密な燃糸文を施文するのを特徴とするが、25、30、36等は太目の燃糸文をやや斜位に施文する。胎土は白色粒子を多く含み、第1類第6種の胎土に類似し、色調も類似する。施文手法からみても、共通する部分が多い。原体はRが圧倒的に多い。

第6種 (第113図、第114図1~35)

肥厚丸頭状口唇部が外反もしくはやや開く器形を呈し、口唇外端部や口唇部下から燃糸文を施文するものを一括する。第5種とほぼ類似するが、若干異なる部分がある。大きく異なるのは整形と施文の関係で、本種は口端部からの燃糸文施文→口唇部整形の順となり、逆転する。口縁部がやや立ち気味となり、燃糸文施文後口唇部に撫で整形を施すため、口唇部形態がやや内削状を呈するものや、尖り気味になるものも存在する。これは、第1類第7種に共通する特徴でもある。第113図1~33、第114図1~35は比較的細く密な燃糸文を施文するもので、第114図36~43は比較的細い燃糸文を間隔を開けて施文し、44~48は太い燃糸文を施文する。原体は殆どがRであるが、第114図38、44~46、48はLである。

第7種 (第115図、第116図1~8)

肥厚丸頭状口唇部がやや開くか、外反しながら立つ器形を呈し、口唇部下から燃糸文を施文するものを一括する。整形と施文の関係は、切り合う部分が少なく不明瞭であるが、重複する部分をみると撫で整形が口唇部全面に施されているのが観察される。従って、口唇外端部からまたは口唇部下からの燃糸文施文→口唇部整形の順であると判断される。口唇部整形は第1類第9種に共通する特徴である。口唇部の整形が強くなると口唇部が丸味を増したり、口唇外端部に面取り状の整形となることもある。燃糸文は概して細いものを施文するが、第116図1~8は太くて間隔の開いた燃糸文を施文している。

第8種 (第116図9~19)

肥厚角頭状口唇部が外反して開く器形を呈し、口端部もしくは口唇下から燃糸文を施文するものを一括する。口唇部は大きく肥厚し、上端部が平坦に整形されている。整形と施文の関係は口端部からの燃糸文施文→口唇部整形の順となる。燃糸文は比較的太目を施文するものが目立ち、口端部からの施文と、口唇部下にやや無文部を設けて施文するもののが存在し、さらに分類可能である。第1類11種に器形、施文手法が類似し、対応するものと思われる。

第9種 (第116図20~28)

四反歩遺跡南地区

やや肥厚する丸頭状口唇部が内彎気味に開く器形を呈し、口縁部に緩い括れ帯を持つ器形を呈するものを一括する。括れ帯から口唇部までは外反気味に反るものが多い。燃糸文は括れ帯を外して施文するものと、括れ帯内にも薄く施文するものがある。整形と施文の関係は口端部まで施文するものから、燃糸文施文→口唇部整形の順であることが観察される。20、25等は括れ帯内に原体を回転しないで引きずる燃糸糸線文を施文している。21～23、27等は括れ帯内には施文していない。第1類第12種に器形、施文等類似する。

第10種 (第116図29～35)

無肥厚丸頭状口唇部が外反気味に開く器形を呈し、口縁部から燃糸文を施文するものである。整形と施文の関係は口縁部もしくは口端部からの燃糸文施文→口唇部整形の順となる。燃糸文はやや間隔が開いたり、燃りが緩い等、あまり整然とはしていない。

第11種 (第116図36～39、第117図1～29)

無肥厚丸頭状口唇部が開き気味に、または若干内彎気味に立つ器形を呈し、口端部から燃糸文を施文するものを一括する。整形と施文の関係は口端部からの燃糸文施文→口唇部整形の順である。口唇部は内削状や尖り気味のものも存在する。燃糸文施文後の口唇部整形が、強く行われたことによるものと思われる。燃糸文は細密なことから、やや太く間隔を開けるもの等のバラエティーがある。第6種に類似し、口唇部の肥厚の有無で区分される。第1類では第15種に対比される。

第12種 (第117図30～42)

無肥厚丸頭状口唇部がやや開き気味に立つ器形を呈し、口端部から燃糸文を施文するものである。整形と施文の関係は口端部からの燃糸文施文→口唇部整形の順である。燃糸文は比較的整然と施文するものが多く、38は斜位に施文する。第8種が無肥厚化したものに近いが、器形において異なる。むしろ、第12種と類似し、口唇部の形状を角頭化したものに近い。

第13種 (第117図43～47)

無肥厚角頭状口唇部が内彎気味に立つ器形を呈し、口縁部に無文部を設けて燃糸文を施文するものである。無文部は区画された整然としたものではなく、口縁部から施文した燃糸文を口唇部及び口縁部の整形で撫で消す部分もある。口唇部上端は平坦に整形される。47は先細りの口唇部を呈するが、器形的な特徴から本種に含めた。

第14種 (第118図1～8、第138図5)

肥厚丸頭状口唇部がやや開きながら立つ器形を呈し、口唇外端部に面取り状の強い整形を施すものを一括する。整形と施文の関係は燃糸文施文→口唇部整形の順である。口唇部に稜が付くほどの強い整形を施すことを特徴とする。燃糸文は比較的太いものを施文し、粗く施文するものが多い。1、2は燃りの緩い燃糸文Lを粗く施文し、4は細いLを施文する。8はやや斜位に太くて粗い燃糸文Rを施文する。

第15種 (第118図9～37、第138図6)

肥厚丸頭状口唇部が立つ器形を呈し、口唇部下に若干無文部を設けて燃糸文を施文するものを一括した。口唇部形態は丸味の強いもの、やや外反するもの、若干内彎するもの等バラエティーがある。燃糸文施文はかなり粗雑となり、原体の太いものが多くなる傾向にある。

第16種 (第119図1~10)

第15種よりも明確に口縁部に無文帯を持つ土器群を一括する。肥厚丸頭状口唇部がやや開く器形を呈し、燃糸文は帯状施文のものが多くなる。口縁部無文帯は広いものでは2cm以上の幅を持ち、小さな破片では無文土器と識別が困難である。口唇部、無文部とも良く撫で整形を施し、燃糸文施文後に、無文部を軽く整形するものも存在する。第1類第17種に器形整形が類似する。

第17種 (第119図11~34)

燃糸文を帯状施文するものを一括した。口唇部は大半が肥厚丸頭状を呈し、やや開く器形のものが多い。燃糸文は口端部から施文するものは少なく、口唇部下の口縁部から施文するものが多い。原体は太いものと細いものと両者を使用している。器形整形等は第7種、第15種に類似する傾向にある。

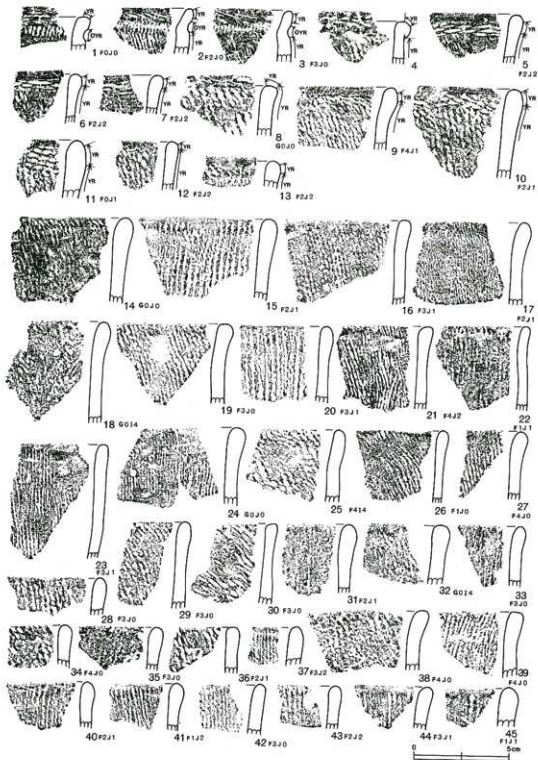
第18種 (第119図35~41、第120図~第128図1~19)

胴部破片を一括する。燃糸文の種類で、以下の様に細分した。

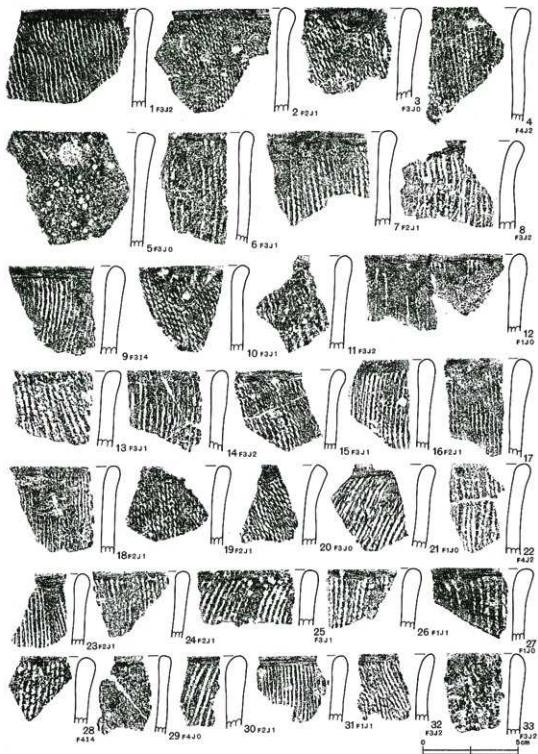
- a. (第120図、第121図1~18) 細くて密接な燃糸文を施文するものを一括する(細密燃糸文)。原体は殆どがRであり、第121図17、18はLである。
- b. (第121図19~34、第122図、第123図1~23) 細い燃糸文でやや条間の開いた燃糸文を施文するものを一括する(細粗燃糸文)。原体は圧倒的にRが多い。
- c. (第123図24~41、第124図1~25) 細い燃糸文で条間を開けた燃糸文を施文するものを一括する(細間燃糸文)。施文は粗くなるものが多くなる。
- d. (第124図26~39、第125図1~19) 太い燃糸文を密に施文するものを一括する(太密燃糸文)。原体は殆どがRであり、第125図19はLを施文する。
- e. (第125図20~37、第126図1~9) 太い燃糸文で間隔を開けた燃糸文を施文するものを一括する(太間燃糸文)。原体はRが多く、第126図5~9はLである。
- f. (第126図10~30、第127図) 燃糸文を帯状に施文するものを一括する(帯状燃糸文)。燃糸文は細目でやや条間の開く原体が多く、帯と帯の間を広く開けるものも存在する。
- g. (第128図1~7) 燃糸文が部分的に引きずられて、条痕文状になるものを一括する(条線化燃糸文)。原体は比較的細密なものが多い。
- h. (第128図8~10) 横位の燃糸文を施文するものを一括する(横走燃糸文)。3点のみ出土した。8は断面が角状を呈する沈線文で口縁部を区画し、胴部に細くてやや間隔の開く燃糸Rを横位に浅く施文している。胎土に白色粒子、細砂粒を多く含むが堅緻な土器であり、橙褐色を呈する。9は8に類似し、同一個体の可能性がある。燃糸Rを浅く施文する。10は底部付近の破片で、間隔の開く燃糸Rを深く横位に施文する。燃糸文は器面が湿っている状態で施文されており、節の圧痕が潰れている部分がある。胎土に長石、石英類の砂粒を多く含み、橙褐色を呈する。

第19種 (第128図11~24)

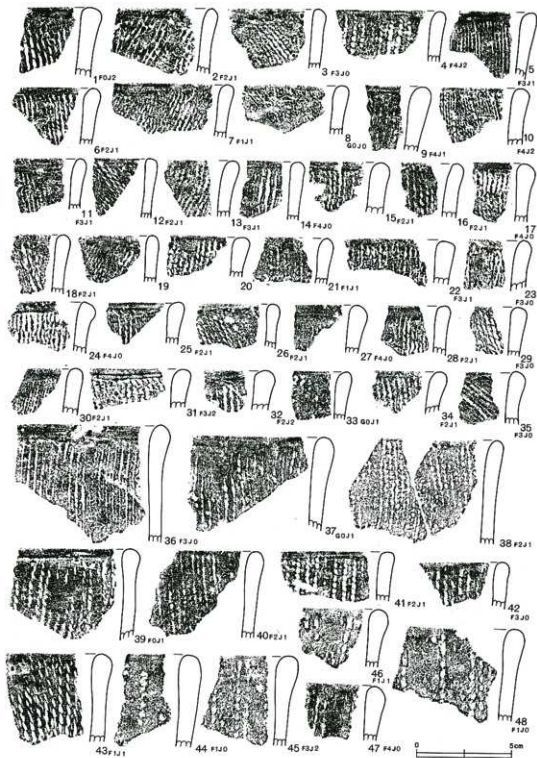
底部を一括する。底部先端の尖底部では、同心円状の線状痕の付くものも多く、全体的に第1類土器の底部より、尖底度合が増す傾向にある。



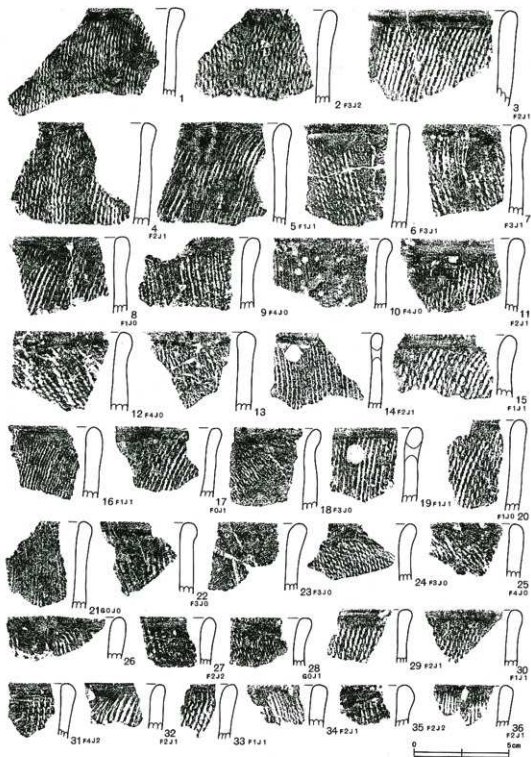
第112図 グリッド出土土器 (3)



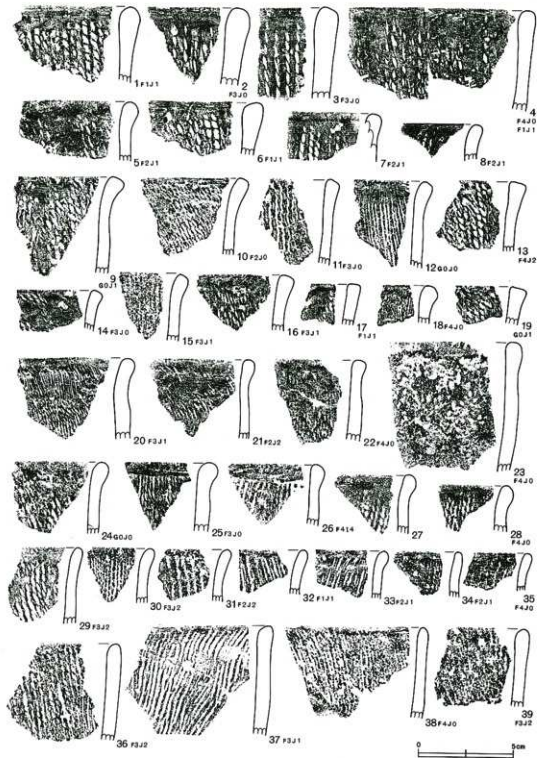
第113図 グリッド出土土器 04



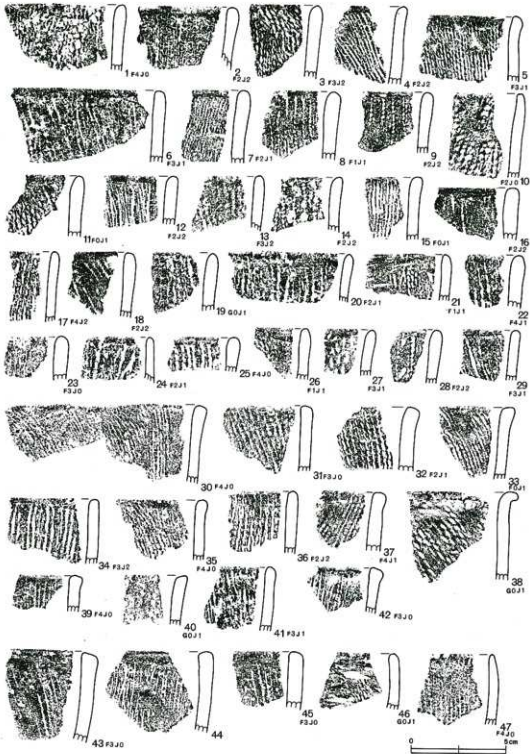
第114図 グリッド出土土器 05



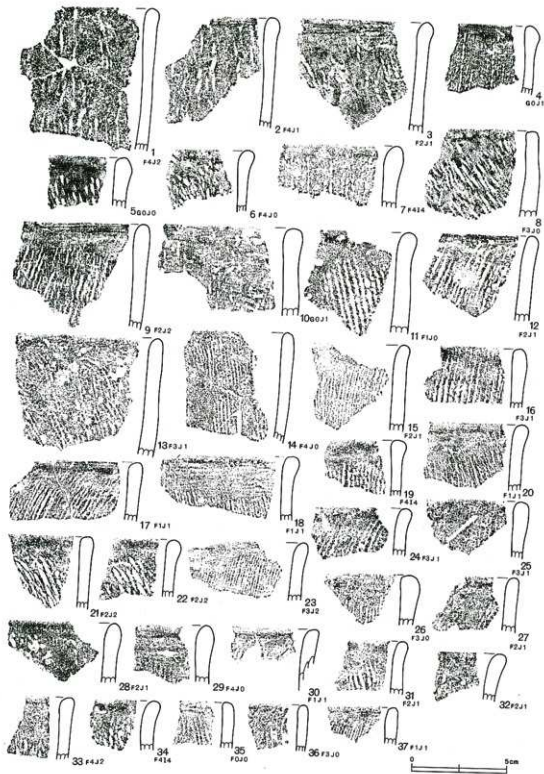
第115図 グリッド出土土器 (6)



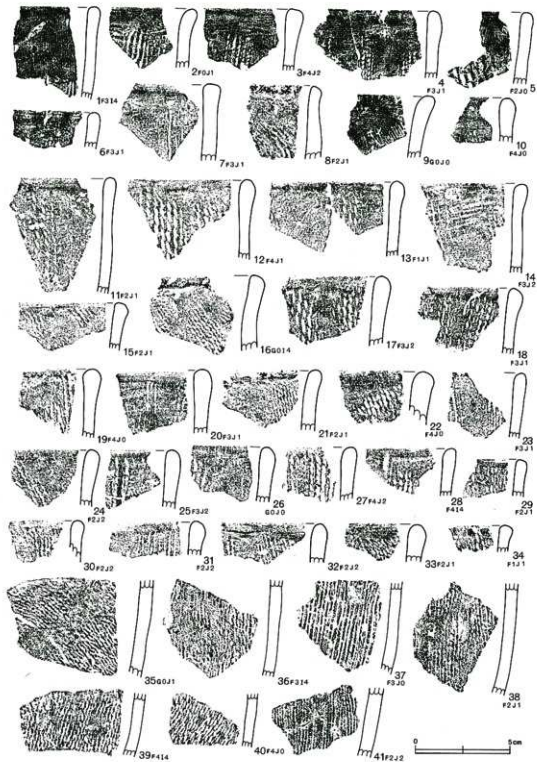
第116図 グリッド出土土器 (17)



第117図 グリッド出土土器 00



第118図 グリッド出土土器 09



第119図 グリッド出土土器 四